

賊、應供ノ三
譯アリ、煩惱
ノ賊ヲ殺ス故
再ルビ死界ニ
現ル、眞ノ聖
者、人ノ天上
ノ供養ニ應ズ
ベシ、今應供ノ
意ヲ強クス
日蓮上人ノ開
目抄上ノ人ノ
設ヒテ蓮惡人
ニテ一言二言
一年二年百劫
二劫乃至千劫
萬億劫此等ノ
聲聞ヲ惡口詈
シ奉リ刀杖ヲ
加ヘマリイラ
ル色ナリトモ

法華經ヲダニ
モ信仰シタル
行者ナラバ
テ給フベカラ
ズ云フカラス
是レ世尊ノ大
華經ノ故ナ
リナ思フカ故ナ

妙法蓮華經信解品第四

まします、希有の事を以つて、憐愍教化して、我等を
利益したまふ、無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん
手足をもつて供給し、頭頂をもつて禮敬し、一切をも
つて供養すとも皆報ずること能はじ、若は以つて頂戴
し、兩肩に荷負して、恆沙劫に於いて、心を盡して恭
敬し、又美膳無量の寶衣及び諸の臥具種種の湯藥、牛
頭栴檀、及び諸の珍寶を以つて、塔廟を起て、寶衣を
地に布く、斯の如き等の事、以用て供養すること、恆
沙劫に於いてすとも、亦報ずること能はじ、諸佛は希
有にして無量無邊、不可思議の大神通力まします、無
漏無爲にして諸法の王なり、能く下劣の爲に斯の事を

忍びたまふ、取相の凡夫に、宜しきに隨ひて爲に説き
たまふ、諸佛は法に於いて最も自在を得たまへり、諸
の衆生の種種の欲樂及び其の志力を知しめして、堪任
する所に隨ひて、無量の諭を以つて爲に法を説きたま
ふ、諸の衆生の宿世の善根に隨ひ、又成熟未成熟の
者を知しめして、種種に籌量し分別し、知しめし已り
て、一乗の道に於いて、宜しきに隨ひて三と説きたま
ふ。

妙法蓮華經信解品第四

第五 藥草諭品（本論其四—三草二木ノ譬）

解題 佛は人中の藥である、能く世間の衆人の苦惱を治し安樂を與ふ、然して佛の弟子及信徒は、やがて此の佛となるべき種性を具へ、之れを生長せしめて居るから、今品には藥草又は藥樹に喩へてある。

大筋 前段迦葉尊者の感謝の辭（長者窮子の譬説）を聞かれた佛は、之れに對して「誠如所言」と肯定を與へ、而し乍ら如來の慈悲、如來の功德は無限の時間を費して讚歎するも猶盡すこと能はざる所である、若しそれ大地に譬へんか、世界の所有草木を載せて、皆一様に培養を

なしつゝあるが如く、若し大空に比せんか、密雲を布いて
 一時に等しく甘雨を降し、能く之れを生長せしめて居る
 が如きである、かく佛は常に一相一味にして少しも偏頗
 ある事なく、又愛憎怨親することなし、然るに之れを受
 くる汝等草木が、其の大なると小なるとの差よりして、
 或は多く或は僅に益を蒙むるの相違を生ぜしめたのであ
 る、而して汝等は全く之れを感知せず各別に性を受け、
 各別に法を佛は説くと思つて居つたであらう、人天界の
 諸王はこれ小草の如きである、三明六通の羅漢はこれ中
 草の如きである、當に作佛を得べき菩薩はこれ大草の如
 きである、又菩薩に於て、専心に佛道を修し、常に慈悲

を懐いで居るはこれ小薬樹、神通自在にして無上法を説
 て、無量百千の衆人を教化するはこれ大薬樹である、三
 草二木相異なるは各自の機根同じからざるに依るのみ、何
 ぞ三乗の別本來として存するものならんや。

年一ニテ天ノ羽降
衣ニテ之レノチ
サスルニ其ノ岩
スリ盡セシテ
一劫ト云フ劫
也レ盤石ノ一劫
三千大千世界
心須彌山四方中
ニ四州アリ上
ニ欲界下界
諸天界等
五輪アリ
チ一世界ト云
フ此ノ世界
ノ小界ト云
チ小界ト云
ヒ小界ト云
集マレチ中

二千界ト云ヒ更
二千界ト云ヒ更
集マレチ中
二千界ト云ヒ更
中界ト云ヒ更
含メテ故ニ三
千世界ト云ヒ更
フ也廣漠宇宙
間ノ無類ノ諸
星體ニ類似セ
リ而モ此ノ
間ニ只一佛ヲ
佛出レテ一佛
之レヲ佛トシ
界ト云フ佛蓋
シ佛ノ統一人
理ノハ世界ノ
類ニ限ラズ人
ガ如キ狭少ノ
モノ知ラザ
ルチノ知ラザ

知し、亦一切衆生の深心の所行を知りて、通達無礙な
り。又諸法に於いて、究盡明了にして、諸の衆生に、
一切の智慧を示す。
迦葉、譬へば、三千大千世界の山川、谿谷、土地に生
ひたる所の卉木、叢林、及び諸の藥草、種種若干にし
て、名色各異なり。密雲彌布して、徧く三千大千世
界に覆ひ、一時に等しく澍ぐ。其の澤普く卉木、叢
林、及び諸の藥草の小根、小莖、小枝、小葉、中根、
中莖、中枝、中葉、大根、大莖、大枝、大葉に洽ふ。
諸樹の大小、上中下に隨ひて、各受くる所有り。一雲
の雨す所、其の種性に稱ひて、而も生長することを得

て、華果敷け實る。一地の所生、一雨の所潤なりと雖
も、而も諸の草木、各差別有るが如し。
迦葉、當に知るべし。如來も亦復是の如し。世に出現
すること、大雲の起るが如く、大音聲を以つて、世界
の天、人、阿脩羅に普徧せること、彼の大雲の、徧く
三千大千國土に覆ふが如し。大衆の中に於いて、是の
言を唱ふ。
我は是如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、
無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊なり。未だ度せ
ざる者なば度せしめ、未だ解せざる者なば解せしめ、
未だ安んぜざる者なば安んぜしめ、未だ涅槃せざる者

現世安穩、後
生善處ノ事、日
蓮上人ノ祈禱

をば涅槃を得しむ。今世後世、實の如く之を知れり。
我は是一切知者、一切見者、知道者、開道者、説道者
なり。汝等天人、阿脩羅衆、皆應に此に到るべし。
法を聽かんが爲の故に。
爾の時に、無數千萬億種の衆生、佛の所に來至して法
を聽く。
如來、時に是の衆生の諸根の利鈍、精進、懈怠を觀じ
て、其の堪ふる所に隨ひて、爲に法を説く種種無量
にして、皆歡喜し快く善利を得しむ。是の諸の衆生、
是の法を聞き已りて、現世安穩にして後に善處に生じ、
道を以つて樂を受け、亦法を聞くことを得。既に法を聞

抄曰大地
ナトモ虚空ナル
ツトナガモア
リトモ潮ノア
チトモ事ハハ
ヨリトモ日ハ
法花經ノ行者
ノ事ハアルハ
カ事ハアルハ
華經ヲ信ゼン
人現世善處シ
疑ナカレベシ
又(祈禱)經一
法華經ニ其切
身ヲ任セ金言
ノ如ク修修セ

き已りて、諸の障礙を離れ、諸法の中に於いて、力の
能ふる所に任せて、漸く道に入ることを得。彼の大雲
の、一切の卉木叢林、及び諸の藥草に雨るに、其の種
性の如く具足して潤を蒙り、各生長することを得る
が如し。如來の説法は一相一味、所謂解脫相、離相、
滅相なり。究竟して一切種智に至る。其衆生有りて、
如來の法を聞きて、若し持し、讀誦し、説の如く修行
するに、得る所の功德自ら覺知せず。所以は何ん。唯
如來のみ有りて、此の衆生種種相體、性、何の事
を念じ、何の事を思し、何の事を修し、云何に念じ、
云何に思し、云何に修し、何の法を以つて念じ、何の

パ髓ニ後生ハ
申スモ息災延
命ニシテ勝妙
ノ大果報ヲ得
廣宣流布ノ大
願ヲモ成就ス
ベキ也成就ス
地ハ一相味大
雨ハ一相味也
佛ノ慈悲ニ約
スレバ平等一
視、衆生ノ心
ニ付テ云ヘバ
心相ハ萬物一
也、無量ノ法
皆一理ニ皈ス
ル是レ一味ナ
解脫相、離相、

滅相、煩惱ノ
惑ヲ脱ス、繫
一、切ノ業、繫
離、苦、果、滅
死、ノ、苦、果、滅
ス、ル、ト、也、
種、相、體、性、衆
生、ノ、體、質、心、相
親、レ、ガ、三、乘、ノ
性、レ、ハ、直、ニ、洞
何、レ、ハ、直、ニ、洞
如、來、ハ、直、ニ、洞
見、ス、ハ、直、ニ、洞
究、盡、滯、滯、業、常
寂、滅、離、滅、却、業
苦、チ、脱、離、滅、却、業
ス、レ、バ、即、チ、滅、却、業
竟、セ、ル、彼、岸、也
此、ノ、處、常、ニ、寂
滅、ノ、地、所、謂
空、ニ、皈、ス、所、謂

法を以つて思し、何の法を以つて修し、何の法を以つて何の法を得といふことを知り。衆生の種種の地に住せるを、唯如來のみ有りて、如實に之を見て明了無礙なり。彼の卉木叢林、諸の藥草等の、而も自ら上中の性の知らざるが如し。如來は是一相一味の法なりと知しめせり。所謂解脫相、離相、滅相、究竟涅槃、常寂滅相にして、終に空に歸す。佛是を知り已れども、衆生の心欲を觀じて之を將護す。是の故に、即ち爲に一切種智を説かず。汝等迦葉、甚だ爲希有なり。能く如來の隨宜の說法を知りて、能く信じ能く受く。所以は何ん。諸佛世尊の

隨宜の說法は、解り難く知り難ければなり。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

有を破する法王、世間に出現して衆生の欲に隨ひて種種に法を説く、如來は尊重にして智慧深遠なり、久しく斯の要を默して、務めて速かに説かず、智有るは若聞きて則ち能く信解す、智無きは疑悔して則ち永く失ふ爲し、是の故に迦葉、力に隨ひて爲に説きて、種種の縁を以つて正見を得しむ、迦葉當に知るべし、譬へば大雲の世間に起りて、徧く一切を覆ふに、慧雲潤を含み電光晃曜し、雷聲遠く震ひて、衆をして悅豫せ

有を破する法
王有ハ三界
二十五有ナリ
生死ノ因果相
續スル世間ヲ
有ト云フ

しめ、日光掩蔽して地の上は清涼に、
攪すべきが如く、其の雨普等にして四方に俱に下り、
流澍すること無量にして率土充洽す、山川險谷の幽邃
に生ひたる所の卉木藥草、大小の諸樹百穀苗稼甘蔗蒲
萄、雨の潤す所豊足せずといふこと無し、乾地普く洽
ひ藥木並び茂り、其の雲より出づる所の一味の水に草
木叢林、分に隨ひて潤を受く、一切の諸樹上中下等し
く、其の大小に稱ひて各生長することを得、根莖枝
葉華果光色一雨の及す所、皆鮮澤することを得、其の
體、相、性の大小に分れたるが如く、潤す所是一なれど
も、而も各滋茂するが如し、佛も亦是の如し、世に出

現すること、譬へば大雲の普く一切を覆ふが如し、
に世に出でぬれば、諸の衆生の爲に、諸法の實を分別
し演説す、大聖世尊、諸の天人一切衆の中に於いて、
而も是の言を宣ふ、我は爲如來兩足の尊なり、世間に
出づること猶大雲の如し、一切の枯稿の衆生を充潤し
て、皆苦を離れ、安穩の樂、世間の樂、及び涅槃の樂
を得しむ、諸の天人衆、一心に善く聽け、皆應に此に
到りて無上尊を觀るべし、我は爲世尊なり、能く及ぶ
者無し、衆生を安穩ならしめんが故に世に現じて、大
衆の爲に甘露の淨法を説く、其の法一味にして解脱涅槃
槃なり、一の妙音を以つて斯の義を演暢す、常に大乘

釋、梵釋
天提
因(帝釋)
大梵天
王也

の爲に而も因縁を作す、我一切を觀ずること普く皆平等なり、彼此愛憎の心有ること無し、我貪著無く亦限礙爲し、恆に一切の爲に平等に法を説く、一人の爲にするが如く衆多も亦然なり、常に法を演説して曾て佗事無し、去來坐立に終に疲厭せず、世間に充足すること雨の普く潤すが如し、貴賤上下、持戒毀戒、威儀具足せる及び具足せざる、正見邪見利根鈍根に、等しく法雨を雨して而も懈倦無し、一切衆生の、我が法を聞く者、力の受くる所に隨ひて、諸の地に住す、或は人天の轉輪聖王、釋梵諸王に處する、是小の藥草なり、無漏の法を知りて能く涅槃を得、六神通を起し及び三

明を得、獨山林に處し、常に禪定を行じて緣覺の證を得る、是中の藥草なり、世尊の處を求めて我當に作佛すべしと、精進定を行ずる、是上の藥草なり、又諸の佛子、心を佛道に専らにして、常に慈悲を行じ、自ら作佛せんこと、決定して疑無しと知る、是を小樹と名く、神通に安住して、不退の輪を轉じ、無量億百千の衆生を度する、是の如きの菩薩を、名けて大樹と爲す、佛の平等の説は一味の雨の如し、衆生の性に隨ひて、受くる所不同なり、彼の草木の稟くる所各異なるが如し、佛、此の論を以つて方便して開示し、種種の言辭をもつて一法を演説すれども、佛の智慧に於い

ては海の一滴の如し、我法雨を雨して世間に充滿す、
 一味の法を力に隨ひて修行すること、彼の叢林藥草諸
 樹其の大小に隨ひて漸く茂好を増すが如し、諸佛の法
 は、常に一味を以つて諸の世間をして普く具足するこ
 とを得しめたまふ、漸次に修行して皆道果を得、聲聞
 緣覺の、山林に處し、最後身に住して法を聞き得果
 する、是を藥草各增長することを得と名く、若諸
 の菩薩、智慧堅固にして、三界を了達し、最上乘を
 求むる、是を小樹の而も增長することを得と名く、復
 禪に住して神通力を得、諸法の空を聞きて心大いに歡
 喜し、無數の光を放ちて諸の衆生を度すること有る、

是を大樹の而も增長することを得と名く、是の如く迦
 葉、佛の所説の法は、譬へば大雲の一味の雨を以つて
 人華を潤して各實を成ずることを得しむるが如し、迦
 葉當に知るべし、諸の因緣種種の譬諭を以つて佛道を
 開示す、是我が方便なり、諸佛も亦然なり、今汝等が
 爲に最實事を説く、諸の聲聞衆は皆滅度せるに非ず、
 汝等が所行は是菩薩道なり、漸漸に修學して悉く當に
 成佛すべし。

後鳥羽院御製

いたづらにもる、草木もなかりけり

一味の雨の所わかれば

第六 授記品 (本論其五—第二回授記)

解題 授記といふことは、記別を授けるといふことで、
 記別といふのは「汝未來世ニ於テ當ニ成佛スルデアロウ」
 といふ將來を見貫かれた佛の證言である、これには劫、
 國、名號といふ三種の具體的なものが必ず添ふて居る、
 劫とは時間を指すもので佛の壽命、及び説かれた法の流
 布の期間を示し國とは成佛すべき國の名稱で、名號とい
 ふのは成佛する佛の名前を指すのである、
 大筋 已に長老舍利弗は方便品の法説を聞いて直に領解し
 之れを譬諭品の始に於て告白し、華光如來の記別を受け

た、次で迦葉等の大弟子譬諭品の火宅三車の譬説を聞いて其の領解を信解品に於て長者窮子の譬に寄せて述べた事は前説の如くである、それで佛は其の證得の正しい事を認めて此の品に於て左の如く第二回目の授記を行れた、

名 號 國名 劫

1 光明如來……………光德……………佛壽十二小劫……………迦葉

正法住世廿小劫
像法住世廿小劫

2 名相如來……………寶生……………同……………上……………須菩提

3 閻浮那提金光如來……………(本文二)……………同……………上……………迦旃延

(省略)

4 多摩羅跋旃檀香如來……………意樂……………佛壽二十四小劫……………目連

正法住世四十小劫
像法住世四十小劫

序ながら述べて置くが、第一回の授記を受けたのを法説周といひ第二回を譬説周といふ、後に化城喻品の因縁を聞いて證を開いたものを因縁説周といふ、周は段と同意で一と二と三と各知識の程度に相違がある、即ち段階がある、從て第一は法を聞いて直ちに悟を開き、第二は譬を聞いて法を解し、第三は因縁を以て漸く法に至ることが出來たのである、それから佛の名號の次に如來、應供、乃至佛、世尊といふのが附いてあるが、これは佛陀の十號といふて、何れも佛でなくては具へ得ぬ殊徳である、即ち換言すれば佛は必ず十種の殊徳を具へて居るのである、如來は眞如―眞理より來る即ち眞理の人格化したも

の、應供は一切の人々の供養に應じて能く施主の功德となる、正徧知は正しく徧く知る、即ち正しき悟り、明行足は修行が總て具足（具備）して居る、善逝は妙往で人間が地獄に行けば惡往、惡逝、それに反して悟を開いて佛となる即善逝である、世間解は世間の事如何なる事にも能く解せるが故に、無上士は總ての社會に於て佛以上の士無きを以て、調御丈夫は一切を能く調のへ能く御する丈夫、天人師は天も人も皆師とすれば、佛は印度語、譯すれば覺である、自ら覺り他をも覺らしむ、世尊は、世間に於て尤も尊貴なるを以て、かく號するのである、

妙法蓮華經授記品第六

最上二足尊
無上人天界ノ
尊貴ナルモノ
ヲ指ス
正法、像法
佛ノ滅後ノ一

爾の時に世尊、是の偈を説き已りて、諸の大衆に告げて、是の如き言を唱へたまはく、

我が此の弟子摩訶迦葉は、未來世に於いて、當に三百萬億の諸佛世尊を奉觀して、供養恭敬し、尊重讚歎して、廣く諸佛無量の大法を宣ぶることを得べし。最後身に於いて、佛に成爲ることを得ん。名をば光明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。國をば光徳と名け、劫をば大莊嚴と名けん。佛の壽は十二小劫、正

千年間佛正シノ
餘威能ク持ス
ク佛法正法ノ
コレヲ正法ノ
時ト云ヒ、其
後ト云ヒ、流
式ニノミ流ル
フ、チ像ハ形也

法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫、劫ならん。國界嚴飾して、諸の穢惡、瓦礫、荆棘、便利の不淨無く、其の土平正にして、高下、坑坎、堆阜有ること無けん。瑠璃を地と爲して、寶樹行列し、黄金を繩と爲して、以つて道の側を界ひ、諸の寶華を散じて、周徧して清淨ならん。其の國の菩薩、無量千億にして、諸の聲聞衆、亦復無數ならん。魔事有ること無けん。魔及び魔民有りと雖も、皆佛法を護らん。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、
諸の比丘に告ぐ、我佛眼を以つて、是の迦葉を見るに、

未來世に於いて無數劫を過ぎ當に作佛することを得べし、而も來世に於いて、三百萬億の諸佛世尊を供養し奉觀して、佛の智慧を爲つて淨く梵行を修し、最上二足尊を供養し已りて一切の無上の慧を修習し、最後身に於いて佛に成爲ることを得ん、其の土清淨にして瑠璃を地と爲し、諸の寶樹多くして道側に行列し、金繩道を界ひて見る者歡喜せん、常に好香を出し衆の名華を散じて、種種の奇妙なる以つて莊嚴と爲し、其の地平正にして丘坑有ること無けん、諸の菩薩衆稱計すべからず、其の心調柔にして大神通に逮り、諸佛の大乘經典を奉持せん、諸の聲聞衆の、無漏の後身に

悚慄 感極マ
ツテ泣クノ類
ヒ也

諸釋の法王
佛ハ釋迦族ヨ
リ出テ成道
シ玉ヘリ故ニ
カク云フ

して、法王の子なる亦計るべからず、乃ち天眼を以つても數へ知ること能はじ、其の佛は當に壽十二小劫なるべし、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん、光明世尊其の事是の如し。爾の時に大目犍連、須菩提、摩訶迦旃延等、皆悉く悚慄して、一心に合掌し、世尊を瞻仰して、目暫くも捨てず。即ち共に聲を同じうして、偈を説きて言さく、大雄猛世尊諸釋の法王、我等を哀愍したまふが故に而も佛の音聲を賜へ、若我が深心を知しめして、授記すること爲らるれば、甘露を以つて灑ぐに熱を除いて、清涼を得るが如くならん、飢ゑたる國より來りて、忽ちに大王の膳に遇へらん

が如く、心猶疑懼を懷きて未だ敢へて即便食せず、若復王の教を得て、然して後に乃ち敢へて食せんが如く、我等も亦是の如し、毎に小乗の過を惟ひて、當に云何して佛の無上慧を得べきかを知らず、佛の音聲の我等作佛せんと言ふことを聞くと雖も、心尙憂懼を懷くと未だ敢へて便ち食せざるが如し、若佛の授記を蒙りなば、爾乃快く安樂ならん、大雄猛世尊、常に世間を安んせんと欲す、願はくば我等に記を賜へ、飢に教を須つて食するが如くならん。爾の時に世尊、諸の大弟子の、心の所念を知しめして、諸の比丘に告げたまはく、

是の須菩提は、當來世に於いて、三百萬億那由他の佛を奉觀して、供養恭敬し、尊重讚歎し、常に梵行を修し、菩薩の道を具して、最後身に於いて、佛と成爲ることを得ん、號をば名相如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。劫を有寶と名け、國をば寶生と名けん。其の土平正にして、頗黎を地と爲し、寶樹莊嚴して、諸の丘坑、沙磧、荆棘、便利の穢無く、寶華地に覆ひ、周徧して清淨ならん。其の土の人民、皆寶臺、珍妙の樓閣に處せん。聲聞の弟子、無量無邊にして、算數譬諭の知ること能はざる所ならん。諸の菩薩衆、無數千

萬億那由他ならん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。其の佛、常に虚空に處して、衆の爲に法を説きて、無量の菩薩、及び聲聞衆を度脱せん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、
 諸の比丘衆、今汝等に告ぐ、皆當に一心に我が所説を聽くべし、我が大弟子須菩提は當に作佛することを得べし、號をば名相と曰はん、當に無數萬億の諸佛を供して、佛の所行に隨ひて漸く大道を具すべし、最後身に三十二相を得て端正殊妙なること猶寶山の如くなら

八解脱 背捨トモ云フ
八種ノ觀念ヲ
修シテ聲ノ
五欲（色聲香
味觸）ヲ捨テ
執着心ヨリ解
脫ス、名目ハ
略ス

ん、其の佛の國土嚴淨第一にして、衆生の見ん者愛樂せずといふこと無けん、佛、其の中に於いて無量の衆を度せん、其の佛の法の中には、諸の菩薩多く、皆悉く利根にして不退輪を轉せん、彼の國は常に菩薩を以つて莊嚴せり、諸の聲聞衆も稱數すべからず、皆三明を得六神通を具し、八解脱に住して大威徳有らん、其の佛の説法には、無量の神通變化を現すること不可思議ならん、諸天人、數、恆沙の如く、皆共に合掌して佛語を聽受せん、其の佛は當に壽十二小劫なるべし、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。

爾の時に世尊、復諸の比丘衆に告げたまはく、我今汝に語る。是の大迦旃延は、當來世に於いて、諸の供具を以つて八千億の佛に供養奉事して、恭敬尊重せん。諸佛の滅後に、各塔廟を起てん。高さ千由旬、縱廣正等にして、五百由旬ならん。金、銀、瑠璃、砮磈、碼碯、眞珠、玫瑰の七寶を以つて合成し、衆華、瓔珞、塗香、抹香、燒香、繒蓋、幢幡を塔廟に供養せんと、是を過ぎで已後、當に復二萬億の佛を供養すること、亦復是の如くすべし。是の諸佛を供養し已りて、菩薩道を具して、當に作佛することを得べし、號をば閻浮那提金光如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世

問解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。其の土平正にして、頗黎を地と爲し、寶樹にて莊嚴し、黄金を繩と爲して、以つて道の側を界ひ、妙華地に覆ひ、周徧清淨にして、見る者歡喜せん。四惡道の地獄、餓鬼、畜生、阿脩羅道無く、多く天人有らん。諸の聲聞衆、及び諸の菩薩、無量萬億にして、其の國を莊嚴せん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

諸の比丘衆、皆一心に聽け、我が所説の如きは眞實に

して異なること無し、是の迦旃延は、當に種種の妙好の供具を以つて諸佛を供養すべし、諸佛の滅後に、七寶の塔を起て亦華香を以つて舍利を供養し、其の最後身に佛の智慧を得て等正覺を成じ、國土清淨にして無量萬億の衆生を度脱し、皆十方に供養せらるること爲ん、佛の光明能く勝る者無けん、其の佛の號をば閻浮金光と曰はん、菩薩聲聞、一切の有を斷せる無量無數にして其の國を莊嚴せん。

爾の時に世尊、復大衆に告げたまはく、我今汝に語る。是の大目犍連は、當に種種の供具を以つて、八千の諸佛を供養し、恭敬尊重したてまつるべ

し、諸佛の滅後、各塔廟を起て、高さ千由旬縦、廣正
 等にして、五百由旬ならん。金、銀、瑠璃、砮磔、碼
 碯、眞珠、玫瑰の七寶を以つて合成し、衆華、瓔珞、
 塗香、抹香、燒香、繒蓋、幢幡を供養せん。是を過ぎ
 て已後、當に復、二百萬億の諸佛を供養すること、亦
 復是の如くすべし。當に成佛することを得べし。號を
 ば多摩羅跋梅檀香如來、應供、正徧知、明行足、善逝、
 世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰は
 ん。劫をば喜滿と名け、國をば意樂と名けん。其の土、
 平正にして、頗黎を地と爲し、寶樹莊嚴し、眞珠華
 を散じ、周徧清淨にして、見る者歡喜せん。諸の天

人、菩薩、聲聞、其の數無量ならん。佛の壽は二十四
 小劫、正法世に住すること四十小劫、像法亦住するこ
 と四十小劫ならん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説
 きて言はく、

我が此の弟子大目犍連は、是の身を捨て已りて八千二
 百萬億の諸佛世尊を見たてまつることを得、佛道の爲
 の故に供養恭敬し、諸佛の所に於いて常に梵行を修し、
 無量劫に於いて佛法を奉持せん、諸佛の滅後に、七寶
 の塔を起てて長く金刹を表し、華香伎樂をもつて而も
 以つて諸佛の塔廟に供養し漸漸に菩薩の道を具足し已

御時代を計るに、數ふべき數が無いといふ事を知らねばならぬ、而し譬を以ていうたならば、茲に三千大千世界がある、それを一丁の墨に煉り上げ、これを磨つて仕舞うて筆に附け、東方千の世界を過ぐる毎に一點を打ち、すつかり墨を無くなしてから、其の出發點より最終の世界迄、無慮幾億千萬の世界を殘らず、一揉みに揉みつぶして、其の一塵を一劫と計算して行つたならば、彼の佛の年代が略ぼ察することが出来るであらう。

此の佛が出家遊ばされる時に十六人の王子が城に残されてあつた、然るに父の王が御悟りを開かれたといふ事を知つて、早速大勢の家來に守られて此の大通智證佛の

御許へ行かれ、無上の大法を説かんことを請はれた、又同時に十方の大梵天王が雲の如く集まつて同様に求法の志を陳べた、それで佛は十二因縁の法門を演説された、處がそれを聞いた十六王子は直に出家をせられる、又之れを見習うて八萬億の人々が出家した、佛は進んで大乘教妙法華經を御説きになつて、入定遊ばさる、其の入定の間十六人の沙彌は佛の代りに交々高座に登つて聞た所を覆演された、此の時聽衆は後に十六人の何れかの弟子となる因縁を結ばれたのである、此の十六沙彌は後に成佛されたが、彼の阿彌陀佛は第九番目の方で西方の世界で成佛された、我が釋迦牟尼佛は第十六番目に此の娑婆

世界で今日佛になつた。

釋迦佛は諸の弟子に告げられるには、汝等聲聞も其時に我れと師弟の縁を繋いだのである、已來汝等を救はんが爲に、先づ小果を授けたけれども實は佛といふ大果に導かんが爲に外ならないのである、譬を以て云へば五百由旬の險阻な道を忍んで行けば非常な珍寶がある、それを知つた一人が、案内者で大勢の人を將ゐて出懸けたが、何分の惡道であるので皆中途で引還へすことを望んだ、そこで案内者が折角此處迄來たのだからごうかしてと、方便を以て三百由旬の處に一の立派な城閣を化現し、彼處が目的地である、進めや進めと鼓舞したので、それ

と元氣が出て其處迄行つて、ヤレ一服と喜んで、處で案内者は人々の疲れの回復するのを待つて化城を取り消し、實は云云の爲に一時化現したのである、眞の目的地は猶二百由旬の彼方にありといつて、遂に目的を達せしめたといふ様なものである、聲聞等の證得は三百由旬、佛の覺悟は五百由旬、中途退轉の萌が見えたので暫く二乗の賤位を與へた、而しそれは佛となるべき階梯であることを忘れてならぬ、と同時にこれに固着するは愚の至りであることを知らねばならぬ。

妙法蓮華經化城諭品第七

佛、諸の比丘に告げたまはく、
 乃往過去、無量無邊不可思議阿僧祇劫、爾の時に佛有
 しき。大通智勝如來、應供、正徧知、明行足、善逝、
 世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と名く。
 其の國をば好成と名け、劫をば大相と名けき。諸の比
 丘、彼の佛の滅度より已來、甚だ大いに久遠なり。譬
 へば三千大千世界の所有の地種、假使人有りて、磨り
 て以つて墨と爲し、東方千の國土を過ぎて、乃ち一點
 を下さん。大いさ微塵の如し。又千の國土を過ぎて、

妙法蓮華經化城諭品第七

二二三

地種 世界火
 ナセル 大地ノ
 風ノ四種ハ
 一ナリ種ハ
 質下同シ原

復一點を下さん。是の如く展轉して地種の墨を盡さんが如く、汝等が意に於いて云何。是の諸の國土をば、若は算師、若は算師の弟子、能く邊際を得て、其の數を知らんや不や。不なり、世尊。諸の比丘、是の人の經る所の國土の、若は點せると點せざるを、盡く抹して塵と爲して、一塵を一劫とせん。彼の佛の滅度より已來、復是の數に過ぎたること、無量無邊百千萬億阿僧祇劫なり。我如來の知見力を以つての故に、彼の久遠を觀ること、猶今日の若し。

爾の時に世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

無礙智佛所
一切障無所
智惠ノ向フキ
一ノ障ノ無所
ノ切障ノ無所
ノ意障ノ無所
トアルモ同

我過去世の無量無邊劫を念ふに、佛兩足尊有しき、大通智勝と名く、如人力を以つて三千大千の土を磨りて、此の諸の地種を盡し、皆悉く以つて墨と爲して、千の國土を過ぎて、乃ち一の塵點を下さん、是の如く展轉し、點じて此の諸の塵墨を盡さん、是の如きの諸の國土の、點せると點せざるを復盡く抹して塵と爲して、一塵を一劫と爲ん、此の諸の微塵の數に其の劫復是に過ぎたり、彼の佛の滅度より來、是の如く無量劫なり、如來の無礙智、彼の佛の滅度及び聲聞菩薩を知らんこと今の滅度を見るが如し、諸の比丘當に知るべし、佛智は淨くして微妙に、無漏無所礙にして無量劫

阿耨多羅三藐三菩提 正覺 下譯 無上

佛、諸の比丘に告げたまはく、
 大通智勝佛は、壽五百四十萬億那由佗劫なり、其の佛、
 本と道場に坐して、魔軍を破し已りて、阿耨多羅三藐
 三菩提を得たまはんするに、而も諸佛の法、現在前せ
 ず。是の如く一小劫、乃至十小劫、結跏趺坐して、身
 心動じたまはず。而も諸佛の法、猶在前せざりき。爾
 の時に、忉利の諸天、先より彼の佛の爲に、菩提樹下に
 於いて、師子の座を敷けり。高さ一由旬。佛此の座に
 於いて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべしと。
 適めて此の座に坐したまふ。時に諸の梵天王、衆の天

華を雨すこと、面ごとに百由旬なり。香しき風、時に
 來りて、萎華を吹き去りて、更に新しき者を雨す。是の
 如く絶えず。十小劫を満てて佛を供養す。乃至滅度ま
 で、常に此の華を雨しき。四王の諸天、佛を供養せん
 が爲め、常に天鼓を撃つ。其餘の諸天、天の伎樂を作
 すこと、十小劫を満つ。滅度に至るまで、亦復是の如
 し。
 諸の比丘、大通智勝佛、十小劫を過ぎて、諸佛の法乃
 し現在前して、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまひき。
 其の佛、未だ出家したまはざりし時に、十六の子有り。
 其の第一をば名を智積と曰ふ。諸子、各種種の珍異玩

大威徳世尊の
二部經中ノ下十
陀ナリ、孤起
トモ飄頌トモ
云フ

好の具有り、父、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを
得たまふと聞きて、皆所珍を捨てて佛所に往詣す。諸
母、涕泣して、隨ひて之を送る。其の祖轉輪聖王、一
百の大員、及び餘の百千萬億の人民と、皆共に圍繞し
て、隨ひて道場に至り、咸く大通智勝如來に親近して、
供養、恭敬、尊重、讚歎したてまつらんと欲す。到り
已りて、頭面に足を禮し、佛を繞り畢已りて、一心に
合掌し、世尊を瞻仰して、偈を以つて頌めて曰さく、
大威徳世尊、衆生を度せんが爲の故に、無量億歳に於
いて、爾乃成佛することを得て諸願已に具足したまへ
り、善い哉吉無上なり、世尊は甚だ希有なり、一たび

釋首南無
譯セシモノ
命下等シ身
俱ニ捧グル
心ノ心

坐して十小劫、身體及び手足靜然として安んじて動せ
ず、其の心常に擔怕にして未だ曾て散亂せず、究竟し
て永く寂滅し、無漏の法に安住したまへり。今者世尊
の安穩に佛道を成じたまふを見て、我等善利を得、稱
慶して大いに歡喜す、衆生は常に苦惱し、盲冥にして
導師無し、苦盡の道を識らず、解脱を求むることを知
らずして、長夜に惡趣を増し、諸の天衆を滅損す、冥
きより冥きに入りて永く佛の名を聞かず、今佛最上
安穩無漏の法を得たまへり、我等及び天人、爲に最大
利を得たり、是の故に咸く稽首して、無上尊を歸命し
たてまつる。

勸請 請求ノ
義、今日ニア
リテハ神佛ヲ
祭リ安ズル時
ニ用ユ
百福 佛ノ三
十二相ノ異名
其ノ一相ハ百
種ノ福德ヲ積
ミテ後得ルモ
ナレバナリ

爾の時に十六の王子、偈をもつて佛を讚め已り、世尊に法輪を轉じたまへと勸請し。咸く是の言を作さく、世尊、法を説きたまへ。安穩ならしむる所多からん。諸天人民を憐愍し饒益したまへ。『重ねて偈を説きて言さく、』世雄は等倫無し、百福をもつて自ら莊嚴し、無上の智慧を得たまへり、願はくば世間の爲に説きて、我等及び諸の衆生の類を度脱し、爲に分別顯示して、是の智慧を得しめたまへ、若我等佛を得ば衆生も亦復然ならん、世尊は衆生の深心の所念を知り亦所行の道を知り又智慧力を知しめせり、欲樂及び修福宿命所行の業、世尊悉く知しめし已れり、當に無上輪を轉じ

たまふべし。

佛、諸の比丘に告げたまはく、大通智勝佛、阿耨多羅三藐三菩提を得たまひし時、十方各五百萬億の諸佛の世界、六種に震動し、其の國の中間幽冥の處、日月の威光も照すこと能はざる所、皆大いに明かなり。其の中の衆生、各相見ることを得て、咸く是の言を作さく、此の中云何してぞ、忽ちに衆生を生ぜる。又其の國界なる諸天の、宮殿、乃至梵宮まで六種に震動し、大光普く照して世界に徧滿し、諸天の光に勝れり。

爾の時に、東方五百萬億の、諸の國土の中の梵天の宮殿、光明照曜して、常の明に倍れり。諸の梵天王、各是の念を作さく、「今者宮殿の光明、昔より未だ有らざる所なり。何の因縁を以つて、此の相を現する。」此の時に諸の梵天王、即ち各相詣いて、共に此の事を議す。而して彼の衆の中に、一りの大梵天王有り。救一切と名く。諸の梵衆の爲に、而も偈を説きて言はく、我等が諸の宮殿、光明昔より未だ有らず、此は是の因縁ぞ、宜しく各共に之を求むべし、爲大徳の天の生せるや、爲佛の世間に出でたまへるや、而も此の大

光明徧く十方を照す。爾の時に五百萬億の、國土の諸の梵天王、宮殿と俱に、各、衣械を以つて、諸の天華を盛りて、共に西方に詣いて是の相を推尋するに、大通智勝如來の、道場菩提樹下に處し、師子の座に坐して、諸天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の、恭敬し圍繞せるを見、及び十六王子の、佛に轉法輪を請するを見る。即時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、繞ること百千而して、即ち天華を以つて、佛の上に散す。其の所散の華、須彌山の如し。并びに以つて、佛の菩提樹に供養す。其の菩提樹、高さ十由旬なり。華の供養已りて、各宮殿

を以つて、彼の佛に奉上して、是の言を作さく、
 唯、我等を哀愍し饒益せられて、所獻の宮殿、願はく
 ば納處を垂れたまへ。
 時に諸の梵天王、即ち佛前に於いて、一心に聲を同じ
 うして、偈を以つて頌へて曰さく、
 世尊は甚だ希有にして値遇するを得ること難し、無量
 の功德を具して能く一切を救護し、天人の大師として
 世間を哀愍したまふ、十方の諸の衆生、普く皆饒益を
 蒙る、我等が從來せる所は五百萬億の國なり、深く禪
 定の樂を捨てたることは、佛を供養せんが爲の故なり、
 我等先世の福ありて宮殿甚だ嚴飾せり、今以つて世尊

に奉る、唯願はくば哀みて納受したまへ。
 爾の時に諸の梵天王、偈をもつて佛を讚め已りて、各、
 是の言を作さく、唯願はくば世尊、法輪を轉じて衆生
 を度脱し、涅槃の道を開きたまへ。
 時に諸の梵天王、一心に聲を同じうして、偈を説きて
 言さく、世雄兩足尊、唯願はくば法を演説し、大慈悲
 の力を以つて苦惱の衆生を度したまへ、爾の時に大通
 智勝如來、默然として之を許したまふ。
 又諸の比丘、東南方の五百萬億の國土の、諸の大梵
 王、各自ら、宮殿の光明照耀して、昔より未だ有ら
 ざる所なるを見て、歡喜踊躍し、希有の心を生じて、

即ち各相詣いて、共に此の事を議す。時に彼の衆の中、一りの大梵天王有り、名けて大悲と曰ふ。諸の梵衆の爲に、偈を説きて言はく、

是の事何の因縁ありて此の如き相を現する、我等が諸の宮殿の光明昔より未だ有らず、爲大徳の天の生せるや爲佛の世間に出でたまへるや、未だ曾て此の相を見ず、當に共に一心に求むべし、千萬億の土を過ぐとも光を尋ねて共に之を推せん。是多くは佛の世に出でて苦の衆生を度脱したまふならん。

爾の時に、五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣袂を以つて、諸の天華を盛りて、共に西北方に詣いて、

是の相を推尋するに、大通智勝如來の、道場菩提樹下に處し、師子の座に坐して、諸天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の、恭敬、圍饒せるを見、及び十六の王子、佛に轉法輪を請するを見る。

時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、繞ること百千市にして、即ち天華を以つて、佛の上に散す。所散の華、須彌山の如し。並びに以つて、佛の菩提樹に供養す。華の供養已りて、各宮殿を以つて、彼の佛に奉上して是の言を作さく、

『唯、我等を哀愍し饒益せられて、所獻の宮殿、願はくば納處を垂れたまへ。』

聖主天中天
佛ノ事也

迦陵頻伽聲
妙聲又ハ好聲
ト譯ス大論ニ
ハ殻中ノ聲衆
鳥ニ勝ルトア

宿福宿世ニ
積メル福德即
チ過去ノ善根
ノ報也

妙法蓮華經化城論品第七

爾の時に諸の梵天王、即ち佛前に於いて、一心に聲を
同じうして、偈を以つて頌して曰さく、
聖主天中の天は迦陵頻伽の聲にして、衆生を哀愍した
まふ、我等今敬禮したてまつる、世尊は甚だ希有にし
て、久遠に一たび現じたまふ、一百八十劫を空しく過ぎ
て佛有すこと無し、三惡道充滿し諸天衆減少せり、
今佛世に出でて衆生の爲に眼と作り、世間の歸趣する
所として一切を救護し、衆生の父と爲りて哀愍し饒益
したまふ者なり、我等宿福の慶ありて、今世尊に値ひ
たてまつることを得たり、
爾の時に諸の梵天王、偈をもつて佛を讚め已りて、各

是の言を作さく、『唯願はくば世尊、一切を哀愍して、
法輪を轉じ、衆生を度脱したまへ。』時に諸の梵天王、
一心に聲を同じうして、偈を説きて言さく、
大聖法輪を轉じて、諸法の相を顯示し、苦惱の衆生を度
して、大歡喜を得しめたまへ、衆生此の法を聞かば道
を得若は天に生じ諸の惡道減少し忍善の者増益せん、
爾の時に大通智勝如來、默然として之を許したまふ。
又、諸の比丘、南方五百萬億の國土、諸の大梵王、各
自ら、宮殿の光明照曜して、昔より未だ有らざる所な
るを見て、歡喜踊躍し、希有の心を生じて、即ち各相
詣いて、共に此の事を議す。何の因縁を以つてか、我等

妙法蓮華經化城論品第七

が宮殿、此の光曜有る。而も彼の衆の中に、一りの大梵天王有り、名けて妙法と曰ふ。諸の梵衆の爲に、偈を説きて言はく、我等が諸の宮殿光明甚だ威曜せり、此因縁無きに非じ、是の相宜しく之を求むべし、百千劫を過ぐれども未だ曾て是の相を見ず、爲大徳の天の生せるや爲佛の世間に出でたまへるや、爾の時に五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣祴を以つて、諸の天華を盛り、共に北方に詣いて、是の相を推尋するに、大通智勝如來の、道場菩提樹下に處し、師子の座に坐して、諸天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の、恭敬圍繞せるを見、及び十六

の王子、佛に轉法輪を請するを見る。時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、繞ること百千市にして、即ち天華を以つて、佛の上に散す。所散の華、須彌山の如し。并びに以つて、佛の菩提樹に供養す。華の供養已りて、各宮殿を以つて、彼の佛に奉上して、是の言を作さく、『唯、我等を哀愍し饒益せられて、所獻の宮殿、願はくば納處を垂れたまへ。』爾の時に諸の梵天王、即ち佛前に於いて、一心に聲を同じうして、偈を以つて頌して曰さく、
世尊は甚だ見たてまつること難し、諸の煩惱を破したまへる者なり、百三十劫を過ぎて今乃ち一たび見たて

優曇波羅 優曇波羅華ノ略
世ニ優曇華ト云フモノ也

妙法蓮華經化城喻品第七

まつることを得、諸の飢渴の衆生に法雨を以つて充満したまふ、昔より未だ曾て観ざる所の無量の智慧者なり、優曇波羅の如くにして、今日乃ち値遇したてまつる、我等諸の宮殿の光を蒙るが故に嚴飾せり、世尊大慈悲をもつて、唯願はくば納受を垂れたまへ、爾の時に諸の梵天王、偈をもつて佛を讚め已りて、各是の言を作さく、
唯願はくば世尊、法輪を轉じて一切世間の諸天、魔、梵、沙門、婆羅門をして、皆安穩なることを獲、而も度脱することを得しめたまへこと。
時に諸の梵天王、一心に聲を同じうして、偈を以つて

頌して曰さく、
唯願はくば天人尊、無上の法輪を轉じ、大法の鼓を撃ち、大法の嬴を吹き、普く大法の雨を雨して無量の衆生を度したまへ、我等咸く歸請したてまつる、當に深遠の音を演べたまふべし、
爾の時に大通智勝如來、默然として、之を許したまふ。西南方乃至下方も亦復是の如し。
爾の時に上方、五百萬億の國土の、諸の大梵王、皆悉く、自ら所止の宮殿の、光明威曜して、昔より未だ有らざる所なるを觀て、歡喜踊躍し、希有の心を生じて、即ち各相詣いて、共に此の事を議す。

何の因縁を以つて、我等が宮殿に、斯の光明有る。
 而して彼の衆の中に、一りの大梵天王有り、名けて尸
 棄と曰ふ。諸の梵衆の爲に、偈を説きて言さく、
 今何の因縁を以つて、我等が諸の宮殿威徳光明曜き
 嚴飾せること未曾有なる、是の如きの妙相は昔より未
 だ聞見せざる所なり、爲大徳の天の生せるや爲佛の世
 間に出でたまへるや、
 爾の時に五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣祴
 を以つて、諸の天華を盛りて、共に下方に詣いて是の
 相を推尋するに、大通智勝如來の道場、菩提樹下に處
 し、師子の座に坐して、諸天、龍王、乾闥婆、緊那羅、

摩睺羅伽、人非人等の、恭敬圍饒するを見、及び十六
 の王子、佛に轉法輪を請するを見る。
 時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、繞ること百千市にし
 て、即ち天華を以つて、佛の上に散す。所散の華、須
 彌山の如し。并びに以つて、佛の菩提樹に供養す。華
 の供養已りて、各宮殿を以つて、彼の佛に奉上して、
 是の言を作さく、
 唯我等を哀愍し饒益せられて、所獻の宮殿、願はくば
 納處を垂れたまへ。
 『時に諸の梵天王、即ち佛前に於いて、一心に聲を同じ
 うして、偈を以つて頌して曰さく。』

十二行の法輪
 道ノ四諦ヲ三
 度ノ行ヲ法輪
 十ニ給フ故
 下ナレハ苦ナリ
 是レ苦ナリハ
 即チ苦ナリハ
 集チ苦ナリハ
 ナルハ原因也
 滅ハ苦チ滅ス

ル也道ハ苦チ
 滅スルノ道也
 廣ク十二因
 説ケバ十二
 二種ノ生ハ
 縁ニ生ズル
 因縁トシテ
 明(過)去ノ世
 煩(過)去ノ世
 行(過)去ノ世
 テ(過)去ノ世
 爲(過)去ノ世
 是レ(過)去ノ世
 ノリテ(過)去ノ世
 ノリテ(過)去ノ世
 スノリテ(過)去ノ世
 託シテ(過)去ノ世
 那シテ(過)去ノ世
 發達シテ(過)去ノ世

偈を説きて言さく、世尊法輪を轉じ、甘露の法鼓を擊ちて、苦惱の衆生を度し、涅槃の道を開示したまへ、唯願はくば我が請を受けて、大微妙の音を以つて哀愍して、無量劫に習へる法を敷演したまへ、爾の時に大通智勝如來、十方の諸の梵天王、及び十六の王子の請を受けて、即時に三たび、十二行の法輪を轉じたまふ。若は沙門、婆羅門、若は天、魔、梵、及び餘の世間の轉ずること能はざる所なり。謂はく、『是苦、是苦の集、是苦の滅、是苦滅の道なり。』及び廣く十二因縁の法を説きたまふ。無明は行に縁たり。行は識に縁たり。識は名色に縁たり。名識は六入に縁たり。六入は觸に縁たり。觸は受に縁たり。受は愛に縁たり。愛は取に縁たり。取は有に縁たり。有は生に縁たり。生は老死、憂悲、苦惱に縁たり。無明滅すれば、則ち行滅す。行滅すれば、則ち識滅す。識滅すれば、則ち名色滅す。名色滅すれば、則ち六入滅す。六入滅すれば、則ち觸滅す。觸滅すれば、則ち受滅す。受滅すれば、則ち愛滅す。愛滅すれば、則ち取滅す。取滅すれば、則ち有滅す。有滅すれば、則ち生滅す。生滅すれば、則ち老死、憂悲、苦惱滅す。

佛、天人大衆の中に於いて、是の法を説きたまひし時、

日蓮上人(題)
目名號勝劣
事(白)彌陀佛
等(凡)夫(ニ)テ
チ(ハ)シ(マ)セ(シ)
時(ハ)妙(法)蓮(華)
經(ノ)五(字)ヲ(習)

ツテコソ給ヒニ
ハナラセ給ヒ
テハ全ク南
無阿彌陀佛
申シテ正覺ヲ
ナラセ給ヒ
リトハ見エズ

妙法蓮華經化城喻品第七

佛、諸の比丘に告げたまはく、
是の十六菩薩は、常に樂ひて、是の妙法蓮華經を説く。
一の菩薩の所化の、六百萬億那由他恆河沙等の衆生、
世世に生るる所、菩薩と俱にして、其に従ひて法を聞
きて、悉く皆信解せり。此の因縁を以つて、四萬億の
諸佛、世尊に値ひたてまつることを得たり。今に盡さ
ず。諸の比丘、我今汝に語る。彼の佛の弟子の十六沙
彌、今皆阿耨多羅三藐三菩提を得て、十方の國土に於
いて、現在に法を説きたまふ。無量百千萬億の菩薩、
聲聞有りて、以つて眷屬と爲り。其の二りの沙彌は、

東方にして作佛す。一をば阿閼と名く。歡喜國に在す。
二をば須彌頂と名く。東南方に二佛あり。一をば師子
音と名け、二をば師子相と名く。南方に二佛あり。一
をば虚空住と名け、二をば常滅と名く。西南方に二佛
あり。一をば帝相と名け、二をば梵相と名く。西方に
二佛あり。一をば阿彌陀と名け、二をば度一切世間苦
惱と名く。西北方に二佛あり。一をば多摩羅跋栴檀香
神通と名け、二をば須彌相と名く。北方に二佛あり。
一をば雲自在と名け、二をば雲自在王と名く。東北方
の佛をば、壞一切世間怖畏と名く。第十六は、我釋迦
牟尼佛なり。娑婆國土に於いて、阿耨多羅三藐三菩提

妙法蓮華經化城喻品第七

日蓮上人（兄）
弟抄（白）今三
周ノ聲聞ト申
シテ舍利弗迦
葉阿難羅云ナ
ハ過去遠々劫
三ノ塵點劫ノ
ソノ佛ト申セ
智勝佛ト申セ
ノ王子ノ第六
ハセシキ菩薩
シマシキ菩薩
ノ菩薩ヨリ法
華ノ習ヒケケ
ルガ縁ニケケ
カサレテ法華
經ヲ捨ケル心
ツキニケケ入
當ニ涅槃に入

入るべし誤
レ小乘聲聞
輩ノ涅槃也

を成せり諸の比丘、我等沙彌爲りし時、各に無量百千
萬億恆河沙等の衆生を教化せり。我に従ひて法を聞き
しは、阿耨多羅三藐三菩提を爲しにき。此の諸の衆生
今に聲聞地に住せる者有り。我常に阿耨多羅三藐三菩
提に教化す。是の諸人等、應に是の法を以つて、漸く
佛道に入るべし。所以は何ん。如來の智慧は、難信難
解なればなり。爾の時の所化の、無量恆河沙等の衆生
は、汝等諸の比丘、及び我が滅度の後の、未來世の
中の聲聞の弟子是なり。我が滅度の後、復弟子有りて、
是の經を聞かず。菩薩の所行を知らず、覺らず。自ら
所得の功德に於いて、滅度の想を生じて、當に涅槃に

入るべし。我餘國に於いて、作佛して、更に異名有ん。
是の人滅度の想を生じ、涅槃に入ると雖も、而も彼の
土に於いて、佛の智慧を求めて、是の經を聞くことを
得ん。唯佛乘を以つて滅度を得。更に餘乘無し。諸
の如來の方便の說法をば除く。諸の比丘、若如來、自
ら涅槃の時、到り、衆又清淨に、信解堅固にして空法を
了達し、深く禪定に入れりと知りぬれば、便ち諸の
菩薩、及び聲聞衆を集めて、爲に是の經を説く。世間
に二乗として、滅度を得ること有ること無し。唯一佛
乘をもつて滅度を得るのみ。比丘當に知るべし。如來
の方便は、深く衆生の性に入れり。其の小法を志樂し、

深く五欲ごよくに著ちやくするを知りて、是等これらが爲ための故ゆゑに涅槃ねはんを説とく。是の人ひと、若聞もしきかば則すなはち便信受しんじゆすべし。
 譬たとへば、五百由旬ごひやくゆじゆんの險難けんなん惡道あくだうの曠はらかに絶たえて、人無ひとなき怖畏ふみの處ところあらん。若多もしおほくの衆しゆあ有りて、此この道みちを過すぎ、珍寶ちんぼうの處ところに至いたらんと欲ほつせん。一ひとりの導師だうし有り。聰慧そうゑ明みやう達たつにして、善よく險道けんだうの通塞つうそくの相さうを知しれり。衆人しゆじんを將導しやうだうして此この難なんを、過すぎんと欲ほつす。所將しよしやうの人衆にんじゆ、中路ちゆうろに懈け退たいして、導師だうしに白まをして言まをさく、我等われら疲極つかれきはまりて復怖畏またふみす。復進またすすむこと能あたはず。前路ぜんろ猶なほ遠とほし、今退いましりぞき還かへりなんと欲ほつす。導師だうしに諸もろもろの方便ほうべん多おほくあり、是この念おもひを作なさく、

此等このやからあはれ惑まひべし。云何いかんぞ太珍寶たいちんぼうを捨すてて、退しりぞき還かへりなんと欲ほつする。
 是この念おもひを作なし已をりて、方便ほうべん力を以もつて、險道けんだうの中なかに於おいて三百由旬さんびやくゆじゆんを過すぎて、一城いちじやうを化作けさす。衆人しゆじんに告つげて言まをはく、汝等なんだちおそ怖おそるること勿なれ。退しりぞき還かへることを得うること莫なか。
 今いま此この大城だいじやうの中なかに於おいて止とつて、意こころの所作しよさに隨したがふべし。若是もしこの城しろに入いりなば、快こころよく安穩あんゑんなることを得えん。若能もしよく前まへみて寶所ほうじよに至いたらば、亦また去さることを得うべし。是この時ときに疲極ひげきの衆しゆ、心大こころおほいに歡喜くわんぎして、未曾みぞ有うなりと歎たんず。

我等今者、斯の惡道を免れて、快く安穩なることを得つ、是に於いて衆人、前みて化城に入りて、已度の想を生じ、安穩の想を生ぜり。

爾の時に導師、此の人衆の、既に止息することを得て、復疲倦無きを知りて、即ち化城を滅して、衆人に語りて曰く、

汝等去來や、寶處は近きに有り。向者の大城は、我が化作せる所なり。止息の爲ならくのみ。と言はんが如く、諸の比丘、如來も亦復是の如し。今汝等が爲に、大導師と作りて、諸の生死、煩惱の惡道、險難長遠にして、應に去るべく、應に度すべきを知れり。若衆生、

八條院高倉
いそぎたて
こゝは假寢の
草枕
なほ奥深し
み吉野の里

但一佛乘を聞かば、則ち佛を見んと欲せず、親近せんと欲せじ。便ち是の念を作さく、

佛道は長遠なり。久しく勤苦を受けて、乃ち成ずることを得べしと。

佛是の心の、怯弱下劣なるを知らしめして、方便力を以つて、中道に於いて止息せんが爲の故に、二涅槃を説く。若衆生、二地に住すれば、如來爾の時に、即便爲に説く。

汝等は所作未だ辨せず。汝が所住の地は佛慧に近し。當に觀察し籌量すべし。所得の涅槃は、眞實に非ず。但是如來、方便の力をもつて、一佛乘に於いて、分別

して三と説く。彼の導師の、止息の爲の故に、大城を化作し、既に息み已りぬと知りて、之に告げて曰く、寶處は近きに在り、此の城は實に非ず。我が化作ならくのみ。と言はんが如し。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

大通智勝佛十劫道場に坐したまへど、佛法現前せず、佛道を成ずることを得たまはず、諸の天神龍王阿脩羅衆等常に天華を雨して以つて彼の佛に供養す、諸天天鼓を撃ち、並びに衆の伎樂を作す、香風萎華を吹きて

更に新好の者を雨しき、十小劫を過ぎ已りて乃ち佛道を成ずることを得たまへり、諸天及び世人心に皆踊躍を懷きぬ、彼の佛の十六の子、皆其の眷屬千萬億の圍繞せると俱に佛所に行き至りて、頭面に佛足を禮して轉法輪を請す、聖師子法雨をもつて我及び一切に充てたまへ、世尊は甚だ値ひたてまつること難し、久遠に時に一たび現じて、羣生を覺悟せんが爲に、一切を震動したまふ、東方の諸の世界五百萬億國の梵の宮殿光耀して、昔より未だ曾て有らざる所なり、諸梵此の相を見て、尋ねて佛所に来至して華を散じて以つて供養し、並びに宮殿を奉上し、佛に轉法輪を請じ、偈を以つて

債 十 十 十 十
兆 十 十 十 十
京 十 十 十 十
柿 十 十 十 十
亥 十 十 十 十

讚歎す、佛、時未だ至らずと知しめして、請を受けて黙然として坐したまへり、三方及び四維上下亦復爾なり、華を散じ宮殿を奉り、佛に轉法輪を請す、世尊は甚だ値ひたてまつることかたし、願はくば大慈悲を以て、廣く甘露の門を開き無上の法輪を轉じたまへ、無量慧の世尊、彼の衆人の請を受けて爲に種種の法、四諦十二縁を宣べたまふ、無明より老死に至るまで皆生縁に従ひて有り、是の如きの衆の過患、汝等應當に知べし、是の法を宣暢したまふ時、六百萬億那由他の諸苦の際を盡すことを得て皆阿羅漢と成る、第二の説法の時、千萬恆沙の衆、諸法に於いて受けずして亦阿羅漢を得、是よ

り後の得道、其の數量有ること無し、萬億劫に算數すとも其の邊を得ること能はじ、時に十六王子、出家して沙彌と作り、皆共に彼の佛に大乘の法を演説したまへと請す、我等及び營從、皆當に佛道を成すべし、願はくば世尊の如く、慧眼第一淨なることを得ん、佛童子の心、宿世の所行を知しめして、無量の因縁種種の諸の譬諭を以つて、六波羅蜜及び諸の神通の事を説き、眞實の法菩薩所行の道を分別して、是の法華經の恆河沙の如き偈を説きたまひき、彼の佛經を説き已りて、靜室にして禪定に入り、一心にして一處に坐したまふこと八萬四千劫、是の諸の沙彌等、佛の禪より未だ出で

蓮日蓮上人(最
蓮房御返事)
日實ニ無始
曠劫ノ契約
常與師俱生ノ
理ナラバ蓮
今度成佛セ
ニ貴邊豈ニ相
離レテ惡趣ニ
墮在スベキ哉

たまはざるを知りて、無量億の衆の爲に佛の無上慧を
説く、各各に法座に坐して是の大乗經を説き、佛の
宴寂の後に於いて、宣揚して法化を助く、一一の沙彌
等の度する所の諸の衆生、六百萬億恆河沙等の衆有り、
彼の佛の滅度の後、是の諸の聞法の者、在在の諸の佛土
に常に師と俱に生ず、是の十六の沙彌、具足して佛道を行
じて今現に十力に在りて各正覺を成ずることを得た
まへり、爾の時の聞法の者、各諸佛の所に在り、其の
聲聞に住すると有るは漸く教ふるに佛道を以つてす、
我十六の數に在りて曾て亦汝が爲に説きぬ、是の故に
方便を以つて、汝を引いて佛慧に趣かしむ、是の本因縁

を以つて今法華經を説きて汝をして佛道に入らしむ、
慎んで驚懼を懷くこと勿れ、譬へば險惡道の、廻かに
絶えて毒獸多く、又復水草無く、人の怖畏する處あら
ん、無數千萬の衆、此の險道を過ぎんと欲す、其の路
甚だ曠遠にして五百由旬を経、時に一りの導師有り、
強識にして智慧有り、明了にして心決定せり、險き
に在りて衆難を濟ふ、衆人皆疲倦して導師に白して言
さく、我等今頓乏せり、此より退き還らんと欲す、導
師是の念を作さく、此の輩甚だ感むべし、如何ぞ退
き還りて大珍寶を失はんと欲する、尋いで時に方便を
思はく、當に神通力を設くべしと、大城郭を化作し

て諸の舍宅を莊嚴す、周市して園林、渠流及び浴池、
 重門高樓閣有りて、男女皆充滿せり、即ち是の化を作
 し已りて、衆を慰めて言はく懼るること勿れ、汝等此
 の城に入りなば各所樂に隨ふべし、諸人既に城に入り
 て心皆大いに歡喜し、皆安穩の想を生じて自ら已に度
 することを得たりと謂へり、導師息み已りぬと知りて
 衆を集めて告ぐ、汝等當に前進すべし、此は是化城な
 らくのみ、我汝が疲極して、中路に退き還らんと欲す
 るを見る、故に方便力を以つて權に此の城を化作せり、
 汝今勤めて精進して、當に共に實所に至るべしと言は
 んが如し、我亦復是の如く、爲一切の導師なり、諸

の道を求むる者の、中路にて懈廢して、生死煩惱の諸
 の險道を度すること能はざるを見る、故に方便力を以
 つて息めんが爲に涅槃を説きて、汝等苦滅し所作皆已
 に辨せりと言ふ、既に涅槃に到り、皆阿羅漢を得たりと
 知りて、爾して乃ち大衆を集めて爲に眞實の法を説く、
 諸佛は方便力をもつて、分別して三乘を説きたまふ、
 唯一佛乘のみ有り息處の故に二を説く、今汝が爲に實
 を説く、汝が所得は滅に非ず、佛の一切智の爲に當に大
 精進を發すべし、汝一切智と十力等の佛法を證り、三十
 二相を具しなば、乃ち是眞實の滅ならん、諸佛の導師
 は、息めんが爲に涅槃を説きたまふ、既に是息み已り

如と知れば佛慧に引入したまふ。

第八 五百弟子受記品（本論其七—第三回の受記）

解題 前段化城諭品の因縁説で、佛意を領解し、茲に授記を得たる五百人の弟子即ち阿羅漢が喜びの餘り、衣裏の寶珠といふ譬を述べる品であるから、かく名けたのである。

大筋 十六王子の事實談を聞いて、成程我等はかゝる宿世の因縁を有するものであつたかと、始めて聲聞の賤果に着したる心を打ち棄てた御弟子方、其代表者とも見るべき富樓那尊者は立ち上つて、而して佛の尊顔を瞬きもせず見上げ奉つた、さすがに大雄辯を以て鳴つたる彼も、

今は全く演ぶる所を知らなかつたと見えて、心中に深く佛の大慈悲を念じ奉つる、之れを黙解ともいふべきか、茲に於て佛は富樓那を過去現在未來に亘つて佛弟子中、說法第一なりと稱歎し給うて、聰て法明如來の記別を授けられるのである、之れを見た千二百の阿羅漢が富樓那と同じく歡喜の念を懷く、佛は之れを知らしめて大迦葉に告げられるには、是の千二百の羅漢に次第に記別を授くるであらう、其の中大弟子憍陳如是六萬二千億の佛を供養して後、普明如來となる、又優樓頻螺迦葉乃至周陀(周梨盤特の事)等五百の羅漢も亦當に普明如來になるであらうと、他の人々は見えないが「千二百の羅漢我今

現前に次第に記を與ふと」あるから略されたものと見る

ことが出来る。此の記別を蒙むりたる五百の羅漢は、歡喜身に餘りて佛の御足を禮し、又自らの小智を責めて曰く、世尊よ、譬ば或人あり、親友の家に至りて酒に酔うて臥した、然るに親友は突然公事の爲に遠く去らねばならぬ事が出来たので、非常なる價を有する寶の珠を其の人の衣の裏に繋けて行つた、酔へる人は總て之れを知らず、醒めて後當もなく其處を去つて衣食の爲に艱難し、僅少の賃銀を得て其日を暮して居つた、處が或る日ヒヨツコリ親友に出喰した、親友は哀れな有様を見て之れは一體どうした

のだ、昔し君に與へた寶珠を、市に賣らば一生安樂に暮すことが出来るのであるのに、今猶衣裏に存するやと、探れば果して有つた。

佛よ我等は醉人の様なものであつた、三千墨點の以前賜はつた寶珠のあるをも知らず、聲聞の小果に満足して居つたのである然る、に今實因縁を聞いて始めて佛といふ珠のありしことを悟ることが出来、身心偏く歡喜に満ちて居ります。

妙法蓮華經五百弟子受記品第八

爾の時に富樓那彌多羅尼子、佛に従ひて是の智慧方便隨宜の説法を聞き、又諸の大弟子に、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふと聞き、復宿世の因縁の事を聞き、復諸佛の、大自在神通の力有すことを聞きたてまつりて、未曾有なることを得、心淨く踊躍す。即ち座より起ちて佛前に到り、頭面に足を禮して、卻りて一面に住し、尊顔を瞻仰して、目暫くも捨てず、而も是の念を作く、世尊は甚だ奇特にして、所爲希有なり。世間の若干の種性に隨順して、方便知見を以つて、爲に法を説きて、

生ノ根性ノ樂
欲スル所ヲ知
リ法ヲ説ク滯
リナキ智ヲ莊
七佛ノ過去莊
現在賢劫ノ四
佛ト云フ
一毘婆尸佛
二尸棄佛
三毘沙浮佛
（過去ノ二佛）
四拘留孫佛
五俱那含牟尼
六迦葉佛
七釋迦牟尼佛
（現在ノ四佛）
賢劫ト云フ
三世ニ夫々劫

名アリ過去ナ
莊嚴劫、未來星
賢劫、未來星
宿劫、未來星
シテ三世ニ各
千佛宛ニ出シ
給フ故ニ三千
佛アリ今釋尊
ハ現在賢劫ノ
第九ノ時ニ出
百九ノ時ニ出
現セシ第四番
目ノ佛ナリト
云フ

淨めんが爲の故に、常に佛事を作して衆生を教化しき。諸の比丘、富樓那は亦、七佛の説法人の中に於いて、第一なることを得、今我が所の、説法人の中に於いて、亦第一なることを爲。賢劫の中の、當來の諸佛の説法人の中に於いても、亦復第一にして、皆佛法を護持し、助宣せん。亦未來に於いても、無量無邊の諸佛の法を護持し、助宣し、無量の衆生を教化し、饒益して、阿耨多羅三藐三菩提を立てしめん。佛土を淨めんが爲の故に、常に勤めて精進し、衆生を教化せん。漸に菩薩の道を具足して、無量阿僧祇劫を過ぎて、當に此の土に於いて、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。號

をば法明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。其の佛、恆河沙等の三千大千世界を以つて、一佛土と爲し、七寶を地と爲し、地の平かなること、掌の如くにして、山陵、谿澗、溝壑有ること無けん。七寶の臺觀、其の中に充滿し、諸天の宮殿、近く虚空に處し、人天交接して、兩ら相見ることを得ん。諸の惡道無く、亦女人無くして、一切衆生、皆以つて化生し、姪欲有ること無けん。大神通を得て、身より光明を出して、飛行自在ならん。志念堅固に、精進智慧ありて、普く皆金色に、三十二相をもつて、而も自ら莊嚴せん。

法喜食、禪悅
食ニシテ前者
ハ智慧ヲ食ト
スルヲ云ヒ後
者ハ禪定ヲ食
トスルヲ云フ

日蓮上人(法華)
華取要抄(日蓮)
日蓮云ク舍利
弗目連ハ現在
ナリテ之レナ
論ズレバ知惠
第一神通第一
ノ大聖也過
去ナレバ金
龍佛、青龍
陀佛、未來
以テ之レ未
論ズレバ華
光如來(多摩
羅跋來檀香
來)靈山ヲ以

其の國の衆生は。常に二食を以つてせん、一には法喜食、二には禪悅食なり。無量阿僧祇千萬億那由他の諸の菩薩衆有りて、大神通、四無礙智を得て、善能く衆生の類を教化せん。其の聲聞衆、算數校計すとも知ることを能はざる所なり。皆六通、三明、及び八解脫を具足することを得ん。其の佛の國土は、是の如き等の無量の功德有りて、莊嚴し成就せん。劫をば寶明と名け、國をば善淨と名く。其の佛の壽命、無量阿僧祇劫にして、法住すること、甚だ久しからん。佛滅度の後、七寶の塔を起てて、其の國に徧滿せん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

諸の比丘諦かに聽け、佛子所行の道は、善く方便を學せんが故に、思議することを得べからず、衆の小法を樂ひて、大智を畏るることを知れり、是の故に諸の菩薩、聲聞緣覺と作る、無數の方便を以つて、諸の衆生の類を化して、自らは聲聞なり、佛道を去ること甚だ遠しと説く、無量の衆を度脱して、皆悉く成就することを得ん、小欲懈怠なりと雖も漸く當に作佛せしむべし。内に菩薩の行を秘し、外に是聲聞なりと現す、少欲にして生死を厭へども實には自ら佛土を淨む、衆に三毒

テ之レチ論ズ
レバ三惑頓盡
ノ大菩薩、本
チ以テ之レチ
論ズレバ、内秘
外現ノ古菩薩
三毒、貪欲、
瞋恚、愚痴ナ

有り示し、又邪見の相を現す、我が弟子是の如く、
方便して衆生を度す、若我具足して種種の現化の事を
説かば、衆生の是を聞かん者、心則ち疑惑を懐きな
ん、今此の富樓那は昔の千億の佛に於いて、所行の道を
勤修し、諸佛の法を宣護し、無上の慧を求むるを爲つ
て、而も諸佛の所に於いて弟子の上に居し、多聞にし
て智慧有りと現じ、所説畏るる所無く能く衆をして歡
喜せしめ、未だ曾て疲倦有らずして以つて佛事を助く、
已に大神通に度り、四無礙慧を具し、衆根の利鈍を知
りて、常に清淨の法を説き、是の如き義を演暢して、
諸の千億の衆を教へ、大乘の法に住せしめて自ら佛

土を淨む、未來にも亦無量無數の佛を供養し、正法を
護りて助宣して亦自ら佛土を淨む、常に諸の方便を以
つて法を説くに畏るる所無く、不可計の衆を度して一
切智を成就せしめ、諸の如來を供養し、法の寶藏を
護持して、其の後に成佛するを得ん、號をば名けて
法明と曰はん、其の國をば善淨と名け、七寶の合成せ
る所、劫をば名けて寶明と爲ん、菩薩衆甚だ多く、其
の數無量億にして皆大神通に度り、威徳力具足して其
の國土に充滿せん、聲聞亦無數にして、三明八解脱あ
りて四無礙智を得たる、是等を以つて僧と爲ん、其の
國の諸の衆生は姪欲皆已に斷じ、純一變化生にして

相を具して身を莊嚴せん、法喜禪悅の食にして、更に餘の食想無けん、諸の女人有ること無く、亦諸の惡道無く、富樓那比丘、功德悉く成滿して、當に斯の淨土の賢聖衆甚だ多きを得べし、是の如き無量の事我今但略して説く、

爾の時に、千二百の阿羅漢の、心自在なる者、是の念を作さく、我等歡喜して、未曾有なることを得つ。若世尊、各授記せらるること、餘の大弟子の如くならば、亦快からざらんや。

佛、此等の心の所念を知しめして、摩訶迦葉に告げたまはく、

日蓮上人(忘)持經事(忘)魯ノ哀公(忘)人好リ移宅(忘)者アリ妻(忘)乃チ其子(忘)ル云又好孔子(忘)云ク又好孔子(忘)ル云又好孔子(忘)リ其シキ者(忘)リ樂シキ者(忘)乃チ其身(忘)ル等云ハ夫(忘)盤特尊者(忘)チ忘ル此レハ名(忘)浮第ノ好(忘)忘ル者(忘)上陀具也(忘)梨樂待ト云フ

是の千二百の阿羅漢、我今當に、現前に次第に、阿耨多羅三藐三菩提の記を與へ授くべし。此の衆の中に於いて、我が大弟子憍陳如比丘、當に六萬二千億の佛を供養し、然して後に、佛と成爲ることを得べし。號をば普明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。其の五百の阿羅漢、優樓頻伽葉、伽耶迦葉、那提迦葉、迦留陀夷、優陀夷、阿菟樓駄、離婆多、劫賓那、薄拘羅、周陀、娑伽陀等、皆當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。盡く同じく一號にして、名けて普明と曰はん。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説

きて言はく、
 僑陳如比丘、當に無量の佛を見たてまつりて、阿僧祇劫を過ぎて乃ち等正覺を成すべし、常に大光明を放ち、諸の神通を具足し、名聞十方に徧し、一切の敬ふ所として常に無上道を説かん、故に號けて普明と爲ん、其の國土清淨にして菩薩皆勇猛ならん、咸く妙樓閣に昇りて、諸の十方の國に遊び、無上の供具を以つて諸佛に奉獻せん、是の供養を作し已りて、心に大歡喜を懷き、須臾に本國に還らん、是の如き神力有らん、佛の壽六萬劫ならん、正法住すること壽に倍し、像法復是に倍せん、法滅せば天人憂へん、其の五百の比丘

次第に當に作佛すべし、同じく號けて普明と曰はん、轉次して授記せん、我が滅度の後に、某甲當に作佛すべし、其の所化の世間、亦我が今日の如くならん、國土の嚴淨及び諸の神通力、菩薩聲聞衆、正法及び像法、壽命の劫の多少、皆上の所説の如くならん、迦葉汝已に五百の自在の者を知りぬ、餘の諸の聲聞衆も、亦當に復是の如くなるべし、其の此の會に在らざるには、汝當に爲に宣説すべし、爾の時に五百の阿羅漢、佛前に於いて、受記を得已りて歡喜踊躍す。即ち座より起ちて佛前に到り、頭面に足を禮し、過を悔いて自ら責む。

世尊、我等常^{つね}に是^この念^{おもひ}を作^なして、自^{みづか}ら已^{すで}に究竟^{くきやう}の滅^{めつ}度^どを得^えたりと謂^{おも}ひき。今^{いま}乃^{すなは}ち之^{これ}を知^しりぬ。無^む智^ちの者^{もの}の如^{ごと}し。所以^{ゆゑ}は何^{いか}ん。我^{われ}等^ら應^{まさ}に、如^に來^よの智^ち慧^ゑを得^うべかりき。而^{しか}るを便^{すなは}ち自^{みづか}ら小^{せう}智^ちを以^もつて足^たれりと爲^なしき。世^せ尊^{そん}、譬^{たと}へば人^{ひと}有^ありて、親^{しん}友^{ゆう}の家^{いへ}に至^{いた}りて、酒^{さけ}に醉^ゑひて臥^ふせり。是^この時^{とき}に親^{しん}友^{ゆう}、官^{くわん}事^じの當^{まさ}に行^ゆくべきありて、無^む價^げの寶^{ほう}珠^{じゆ}を以^もつて、其^その衣^いの裏^{うら}に繫^かけ、之^{これ}を與^{あた}へて去^さりぬ。其^その人^{ひと}醉^ゑひ臥^ふして、都^{すべ}て覺^{かく}知^ちせず。起^おき已^{をは}りて、遊^ゆ行^{ぎやう}して佗^た國^{こく}に到^{いた}りぬ。衣^い食^{じき}の爲^{ため}の故^{ゆゑ}に、勤^{ごん}力^{りき}して求^ぐ索^{さく}すると、甚^{はな}だ大^{おほ}いに艱^{かん}難^{なん}なり。若^も少^{すく}し得^うる所^{ところ}有^あれば、便^{すなは}ち以^もつて足^たれりと爲^なす、後^{のち}に親^{しん}友^{ゆう}會^あひ遇^あうて、之^{これ}を

見^みて是^この言^{ことば}を作^なさく、咄^{つた}い哉^{かな}丈夫^{ぢやうぶ}、何^{なん}ぞ衣^い食^{じき}の爲^{ため}に、乃^{すなは}ち是^この如^{ごと}くなるに至^{いた}る。我^{われ}昔^{むかし}、汝^{なんぢ}をして安^{あん}樂^{らく}なるを得^え、五^ご欲^{よく}を自^じ恣^じせしめんと欲^{ほつ}して、某^{それ}の年^{とし}日^ひ月^{つき}に於^おいて、無^む價^げの寶^{ほう}珠^{じゆ}を以^もつて、汝^{なんぢ}が衣^いの裏^{うら}に繫^かけたり。今^{いま}故^{なほ}現^{げん}に在^あり。而^{しか}るを汝^{なんぢ}知らずして勤^{ごん}苦^く憂^う惱^{なう}して、以^もつて自^じ活^{くわつ}を求^{もと}む。爲^な甚^{はな}だ癡^ちなり。汝^{なんぢ}今^{いま}此^この寶^{たから}を以^もつて所^{しよ}須^{しゆ}に貿^む易^{やく}すべし。常^{つね}に意^いの如^{ごと}く乏^{はぶ}短^{たん}なる所^{ところ}無^なかるべし。といはんが如^{ごと}く、佛^{ほとけ}も亦^{また}是^この如^{ごと}し。苦^く薩^{さつ}爲^たりし時^{とき}、我^{われ}等^らを教^{けう}化^けして、一^{いつ}切^{さい}智^ちの心^{こころ}を發^{おこ}さしめたまひき。而^{しか}るを尋^ついで廢^{はい}忘^{まう}して知^しらず覺^さらず。既^{すで}に阿^あ羅^{らかん}漢^{だう}道^{だう}を得^えて、

自ら滅度せりと謂ひ、資生艱難にして、少しく得て足れり。と爲す。一切の智の願は、猶在りて失せず。今者世尊、我等を覺悟して、是の如き言を作したまはく、諸の比丘、汝等が得たる所は、究竟の滅に非ず。我久しく汝等をして、佛の善根を種るしめたれども、方便を以つての故に、涅槃の相を示す。而るを汝、爲實に滅度を得たりと謂へり。

世尊、我今乃ち知りぬ。實に是菩薩なり。阿耨羅三藐三菩提の記を授かることを得つ。是の因縁を以つて、甚だ大いに歡喜して、未曾有なることを得たり。

爾の時に阿若憍陳如等、重ねて此の義を宣べんと欲して、

無價の寶珠
其の高ウシ
到底人間ノ
到ベキ數量
スベキ無價
シ故ニ無價
云フ有價ノ
也

偈を説きて言さく、

我等無上安穩の授記の聲を聞きたてまつりて、未曾有なりと歡喜して、無量智の佛を禮したてまつる。今世尊の前に於いて自ら諸の過咎を悔ゆ、無量の佛寶に於いて少しく涅槃の分を得、無智の愚人の如くして、便ち自ら以つて足れりと爲しき、譬へば貧窮の人、親友の家に往き至りぬ、其の家甚だ大いに富みて、具さに諸の餽饌を設け、無價の寶珠を以つて、內衣の裏に繋著し、黙して與へて捨て去りぬ、時に臥して覺知せず、是の人既に起きて、遊行して佗國に詣りぬ、衣食を求めて自ら濟ひ、資生甚だ艱難にして、少しく得

て便ち足れりと爲して、更に好き者を願はず、內衣の裏に無價の寶珠有ることを覺らず、珠を與へし親友、後に此の貧人を見て、苦切に之を責め已りて、示すに繫けし所の珠を以つてす、貧人此の珠を見て其の心大いに歡喜し、富みて諸の財物有りて、五欲に而も自ら恣ならんが如く、我等も亦是の如し、世尊長夜に於いて、常に惑みて教化せられて、無上の願を種るしめたまへり、我等無智なるが故に覺らず亦知らず、少しく涅槃の分を得て自ら足れりとて餘を求めず、今佛我を覺悟して、實の滅度に非ず、佛の無上慧を得て、爾して乃ち爲眞の滅なりと言ふ、我今佛に従ひて授記莊嚴の事、

及び、轉次に受決せんことを聞きたてまつりて、身心偏く歡喜す。

中務卿 宗良親王

いにしへもかけし衣の玉をなご

うらめづらしくいま思ふらむ

第九 授學無學人記品

(本論其八―第
四回の授記)

解題 當品は、學、無學の人々が成佛の記別を授かるか
 ら、かく題するのである、學とは有學にて、未だ學すべ
 き餘地ありといふ人、無學は最早學ぶべきもの更に無し
 といふ極位の羅漢を指すのである、因縁説に基く授記と
 しては第二段目である、
 大筋―佛の侍者阿難、佛の長子羅睺羅俱に念ずらく、我
 等も亦授記を蒙むることを得ば本願を満すことが出来る
 であらう、と其時に有學無學の聲聞二千八人俱に兩大弟子
 の如く、一心に佛を念ずる、其處で佛は阿難に山海慧自

在通王佛を、羅睺羅に踏七寶華如來を、學無學の二千人に寶相如來の記別を夫れ、御與へになるのである。此の時新發意の菩薩が密に念はれるには、菩薩の記別と雖、かく懇切丁寧なるを見た事が無い、如何なる因縁にて此の諸の聲聞はかゝる目出度く尊き記別を受くるのであらうかと、佛は直に此の疑を知て告げ給には、我れ昔し空王佛の御許に於て、阿難等と同時に發心したのである、而し我は常に修行に勤め彼れ阿難は常に學問に耽けつて居つた爲に、一步の長を我に譲つたのである、かゝる因縁を以て此の記別を授けると、菩薩は領解し阿難は過去を追憶し、未曾有なることを得て大に喜んだ。

以上方便品より當品に至る八品を迹門分の本論とする。其中に於ても方便品を正中の正と立つ、これ開三顯一が迹門の生命であるが故である、而して開三顯一は方便品に於て全く説き終り、後の七品は殆ど之れが覆演、細説といふが如き觀あるものである、偕其の開三顯一は三乘の別を融合するのであるが、而も聲聞の小果に執するを破るを要とするから本論は聲聞で満され菩薩の名は全然現れない。

妙法蓮華經授學無學人記品第九

爾の時に阿難、羅睺羅、而も是の念を作さく、我等毎に
 自ら思惟すらく、設、授記を得ば、亦快からざらんや。
 即ち座より起ちて、佛前に到り、頭面に足を禮し、俱に
 佛に白して言さく、
 世尊、我等此に於いて、亦應に分有るべし。唯如來のみ
 有して、我等が歸する所なり。又我等は、爲一切世間の
 天人、阿脩羅に知識せらる。阿難は常に侍者と爲りて
 法藏を護持す。羅睺羅は是佛の子なり。若佛、阿耨多羅
 三藐三菩提の記を授けらるれば、我が願既に満じて、衆

妙法蓮華經授學無學人記品第九

二九九

侍者常弼給
 侍ハ阿難尊者
 ナリサレバ佛
 滅後ニ於テ其

ノ説法ヲ結集スル者トシテ、尤モ任ノ重キヲ負ヘリ。故ニ次ギニ法藏ヲ護持スト。云フ。羅睺羅又羅云トモ譯ス。佛未ダ太子タリシ時ハ御子ナリ。其母ハ勸持品(第十二)ニ羅睺羅母耶蘇多羅トアリ往見

の望亦足りなん。
爾の時に、學無學の聲聞の弟子二千人、皆、座より起ちて、偏へに右の肩を袒にし、佛の前に到り、一心に合掌し、世尊を瞻仰して、阿難、羅睺羅の所願の如く、一面に住立せり。
爾の時に佛、阿難に告げたまはく、
汝來世に於いて、當に作佛することを得べし。山海慧自在通王如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けん。當に六十二億の諸佛を供養し、法藏を護持して、然して後に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。二十千萬億恆河沙の諸菩薩

等を教化して、阿耨多羅三藐三菩提を成せしめん。國をば常立勝旛と名けん。其の土清淨にして、瑠璃を地と爲ん。劫をば妙音徧滿と名けん。其の佛の壽命、無量千萬億阿僧祇劫ならん。若人、千萬億無量阿僧祇劫の中に於て、算數校計すとも、知ることを得ること能はじ。正法世に住すること、壽命に倍し、像法世に住すること、復正法に倍せん。阿難、是の山海慧自在通王佛は、十方の無量千萬億恆河沙等の諸佛如來に、共に其の功德を讚歎し稱せらるること爲ん。
爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

我今僧中にして説く、阿難持法者は、當に諸佛を供養して、然して後に正覺を成ずべし、號をば山海慧自在通王佛と曰はん、其の國土清淨にして、常立勝旛と名けん、諸の菩薩を教化せること其の數恆沙の如くならん、佛大威徳有して、名聞十方に満ち、壽命量有ること無けん、衆生を惑むを以つての故に、正法壽命に倍し、像法復是に倍せん、恆河沙等の如き、無數の諸の衆生、此の佛法の中に於いて佛道の因縁を種るん。

爾の時に、會中の新發意の菩薩八千人、咸く是の念を作さく、我等尙、諸の大菩薩の、是の如きの記を得ること

空王佛釋尊
が三無數劫ノ
因位修行中値
遇セシ佛ナリ

を聞かず。何の因縁有りてか、諸の聲聞、是の如き決を得るやと。

爾の時に世尊、諸の菩薩の心の所念を知しめして、之に告げて曰はく、

諸の善男子、我と阿難等と、空王佛の所に於いて、同時に阿耨多羅三藐三菩提の心を發しき。阿難は常に多聞を樂ひ、我は常に勤めて精進す。是の故に我は、已に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。而るに阿難は我が法を護持し、亦將來の諸佛の法藏を護りて、諸の菩薩衆を教化し成就せん。其の本願是の如し。故に斯の記を獲。

阿難面り佛前に於いて、自ら授記、及び國土の莊嚴を聞きて、所願具足し、心大いに歡喜して、未曾有なることを得たり。即時に過去の、無量千萬億の諸佛の法藏を憶念するに、通達無礙なること、今聞の如し。亦本願を識りぬ。

爾の時に阿難、偈を説きて言さく、

世尊は甚だ希有なり、我をして過去の無量の諸佛の法を念せしめたまふこと、今日聞く所の如し、我今復疑無くして佛道に安住しぬ、方便をもつて侍者と爲りて諸佛の法を護持せん、

爾の時に佛、羅睺羅に告げたまはく、

十世界微塵等
大千世界
抹シテ微塵ト
ナシテ其ノ一塵
ナシトナシテ
計算スル數チ
云フ
長子嫡子ノ意

汝來世に於いて、當に作佛することを得べし。蹈七寶華如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けん。當に十世界、微塵等數の諸佛如來を供養すべし。常に諸佛の爲に、而も長子と作ることを、猶今の如くならん。是の蹈七寶華佛國土の莊嚴、壽命の劫數、所化の弟子、正法、像法、亦山海慧自在通王如來の如くにして、異なること無けん。亦此の佛の爲に、而も長子と作らん。是を過ぎて已後、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

密行 嚴密ニ
行ズルノ意ヨ
リ轉ジテ秘密
ニ行ズルモノ
トナレリ、即
チ内秘菩薩
行ノ外現是聲
聞ノ義五百弟
子授記品ノ偈
文 常盤井入
道前太政
臣 かきながす山
の岩根のわす
れ水まで苔の
下にすみけん

我太子爲りし時、羅睺天子と爲れり、我今佛道を成ず
れば法を受けて法子と爲く、未來世の中に於いて、無
量億の佛を見たてまつりて、皆其の長子と爲りて、一
心に佛道を求めん、羅睺天子の密行は唯我のみ能く之を
知り、現に我が長子と爲りて以つて諸の衆生に示す
て無上道を求む、
爾の時に世尊、學無學の二千人を見たまふに、其の意柔
輒に、寂然清淨にして、一心に佛を觀たてまつる。佛
阿難に告げたまはく。
汝、是の學無學二千人を見るや否や。唯然なり、已に

見つと、阿難、是の諸人等は、當に五十世界微塵數の
諸佛如來を供養し、恭敬尊重し、法藏を護持して、未
後に同時に、十方の國に於いて、各成佛することを得
べし。皆同じく一號にして、名けて寶相如來、應供、
正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫
天人師、佛、世尊と曰はん。壽命一劫ならん。國土の
莊嚴、聲聞、菩薩、正法、像法、皆悉く同等ならん。
爾の時に世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説ひ
て言はく、
是の二千の聲聞、今我が前に於いて住せる、悉く皆記
を與へ授く、未來に當に成佛すべし、供養する所の諸

佛は、上に説く塵數の如くならん、其の法藏を護持して、後に當に正覺を成ずべし、各十方の國に於て、悉く同じく一名號ならん、俱時に道場に坐して以て無上の慧を證し、皆名けて寶相と爲ん、國土及び弟子、正法と像法と、悉く等しくして異なること有ること無けん、咸く諸の神通を以て十方の衆生を度し、名聞普く周徧して漸く涅槃に入らん、爾の時に學無學の二千人、佛の授記を聞たてまつりて、歡喜踊躍して、偈を説きて言さく、

世尊は慧の燈明なり、我授記の音を聞たてまつりて、心の歡喜充滿せり、甘露をもつて灌がるるが如し。

第十 法師品 (通論其ノ一 五種法師鑿井近水の譬)

解題 此の品より以下安樂行品に至る迄、結論といふべき位置を占めて居るものである、佛敎にてはこれを流通分と稱す、本論の趣意を廣く長く弘通せんが爲に、其の方法を説くものなるが故である、されば結論では意を盡くすこと能はず、新らしく通論の名を建てる所以である、偕如何にして末代に法華經を弘めんとするかといふに、佛は五種の方法があるべきを説かれてある、一は受持(有難い信じ又)二は讀(法華經を看)三は誦(經を看す暗)四は解(身に體し行ふ)五は書寫(經を書寫し文)である、而して之れを説(の爲に説く)五は書寫(書傳道をなす)である、而して之れを

通じて五種の法師と名ける、何故に法師といふかといへば法を他に教へ弘むる人なる故である、然し前の三は自己の修養に屬し、後の二に至つて始めて師なる義が顯れて居る、前者は消極的後者は積極的と見れば差支は無い要するに、他を教導する人を歎美されたる一段なるが故に當品を法師品と名けたのである。

偕今迄は現在の聲聞等の成佛に關して説いたのであるが、之れよりは末代の人に如何にして法華經を持たすべきやといふ布教問題に及んだのであるから、身を死して法を弘むる菩薩が當面の對手として現れ來るのである、又末代の事であるから末代に法華經を弘められた日蓮上人に

人には尤も關係の深きものなることも察しられる、迹門十四品中方便は教理上の中心として主せられたれども、弘通上に就ては譬諭品と此の品と及び下の勸持品とが最も多く、其の遺文中に引用されてある、日蓮上人を知らんとするものは特に此の一段を味ふべきであるを附言する、

大筋一佛が藥王菩薩に寄せて八萬の大菩薩に告げ給ふには、此の大衆中に於て、總て如何なる人たるを問はず、此の妙法を聞て多少とも信受するものあらば、皆成佛の記別を與ふるであらう、又末代に於て此の法の信を起すものには成佛の保證を與ふるであらう、若し法華經を佛

に對する如く敬ふ人あらば、其の人は已に過去に於て十
 萬億の佛に仕へ、充分佛道修行をした大菩薩である、
 人間を愍れんで其の處に救はんが爲に生れたものであ
 る、又竊に一人の爲にも此の法華經を説かんとするもの
 は、我れ如來の使なる事を信せよ、されば此等の人々を
 一言半句も毀るものは、佛を多言を以て罵るよりも罪深
 きを思はねばならぬ、と如何に佛が此の法の弘まらんこ
 とを希ひ給へるかを伺ふことが出來様、猶一層弘通獎勵
 の爲に、此の經の諸經に勝れたることを示し給ふ、
 佛更に藥王に告げ給ふには、我が説きし經典は數多け
 れども、其中に於て過去に説きしもの、又將來に説かん

とするもの、中に、此の經が尤も勝れたるものである、
 此の經の中には如來の全身が籠つて居るから、此の經を
 外にして如來の生命はないものである、されば此の經を
 持つ人は尤も佛に近接せるものといはねばならぬ、譬へ
 ば渴したる人の高原に水を求めんとして、地を掘るに、
 漸く濕へる土を見たるものは、水の近きを確信して勇
 氣一倍するが如きである、如來の現在すら猶正法には怨
 多き世を、末代に於て法華經の正義を説くものは如何に
 困難であるかは推するに難くない、而して水の近きを知
 りしものの如く、成佛の記に預かれる人は已に如來の室
 に入り、如來の衣を着、如來の座に坐せる人なれば、大

人ハ無數ノ佛ヲ供養スルニモスギタリト見タリ傳教大師この法をたゞ一言もさく人は四方の佛のつかひならずや日蓮上人(四恩抄)曰若人(中略)其罪甚重等云此等ノ經文ヲ起シ信心ヲ起シ身ヨリ汗ヲ流シ兩眼ヨリ涙ヲ流ス事雨ノ如シ我一人此

國ニ生レテ多クノ人ヲシテ一ノ業ヲ造ラシムル事ヲ歎ク

佛藥王に告げたまはく、又如来の滅度の後に、若人有りて、妙法華經の、乃至一偈一句を聞きて、一念も隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與へ授く。若復人有りて、妙法蓮華經の、乃至一偈を受持し、讀誦し、解説し、書寫し、此の經卷に於いて、敬視すること佛の如くにして、種種に華香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、繒蓋、幢幡、衣服、伎樂を供養し、乃至合掌恭敬せん。藥王當に知るべし。是の諸人等は、已に曾て十萬億の佛を供養し、諸佛の所に於いて、大願を成就して、衆生を感むが故に、此の人間に生れたり。藥王、若人有りて、

何等の衆生が未來世に於いて、當に作佛することを得べきと問はば、應に示すべし。是の諸人等、未來世に於いて、必ず作佛することを得ん。何を以つての故に若、善男子、善女人、法華經の、乃至一句に於いても受持し、讀誦し、解説し、書寫し、種種に經卷に、華香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、繒蓋、幢幡、衣服、伎樂を供養し、合掌恭敬せん。是の人は、一切世間の、應に瞻奉すべき所なり。應に如来の供養を以て、之を供養すべし。當に知るべし。此の人はは大菩薩の、阿耨多羅三藐三菩提を成就して、衆生を哀愍して、願ひて此の間に生れ、廣く妙法華經を演べ分別するなり。何

に況や、盡く能く受持し、種種に供養せん者をや。藥王當に知るべし。是の人は、自ら清淨の業報を捨てて、我が滅度の後に於いて、衆生を愍むが故に、惡世に生れて、廣く此の經を演ぶるなり。若是の善男子、善女人、我が滅度の後に、能く竊かに一人の爲にも、法華經の、乃至一句を説かん。當に知るべし。是の人は即ち如來の使なり。如來の所遣として如來の事を行するなり。何に況や、大衆の中に於いて、廣く人の爲に説かんとや。藥王、若惡人有りて、不善の心を以つて、一劫の中に於いて、現に佛前に於いて、常に佛を毀罵せんこと、其の罪尙輕し。若人、一の惡言を以つて、在家、出家の、法華經を讀誦する者を毀謗せんは、其の罪甚だ重し。藥王、其法華經を讀誦する

こと有らん者は、當に知るべし。是の人、佛の莊嚴を以つて、自ら莊嚴するなり。則ち如來の肩に、荷擔せらるること爲ん。其の所至の方には、應に隨ひて向ひ禮すべし。一心に合掌して、恭敬、供養、尊重、讚歎し、華香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、繒蓋、幢幡、衣服、肴膳をもつてし、諸の伎樂を作し、人中の上供をもつて、之を供養せよ。應に天の寶を持つて、以つて之を散すべし。天上の寶聚、應に以つて奉獻すべし。所以は何ん。是の人、歡喜して法を説かんに、須臾も之を聞かば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟することを得んが故なり。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説

きて言はく、
 若佛道に住して、自然智を成就せんと欲せば、常に當
 に勤めて、法華を受持せん者を供養すべし、其疾く、
 一切種智慧を得んと欲すること有らば、當に是の經を
 受持し並びに持者を供養すべし、若能く、妙法華經を
 受持すること有らん者は、當に知るべし佛の所使とし
 て諸の衆生を愍念するなり、諸の能く、妙法華經を受
 持すること有らん者は、清淨の土を捨てて、衆を愍
 むが故に此に生れたり、當に知るべし是の如き人は、
 生せんと欲する所に自在なれば、能く此の惡世に於い
 て、廣く無上の法を説くなり、應に天の華香、及び天

寶の衣服、天上の妙寶聚を以つて、説法者に供養すべ
 し、吾が滅後の惡世に、能く是の經を持たん者をば、
 當に合掌し禮敬して、世尊を供養するが如くすべし、
 上饌衆の甘美及び種種の衣服を是の佛子に供養して
 須臾も聞くことを得んと冀ふべし、若能く後の世に於
 いて、是の經を受持せん者は、我遣して人中に在らし
 めて如來の事を行せしむるなり、若一劫の中に於いて、
 常に不善の心を懷きて、色を作して佛を罵らんは、無
 量の重罪を獲ん、其、是の法華經を讀誦し持つこと有
 らん者に、須臾も惡言を加へんは、其の罪復彼に過ぎ
 ん、人有りて佛道を求め、一劫の中に於いて、合掌し

已說、今說、當說、四餘年ノ經、法華經ノ序說

無量義經、當說、四餘年ノ經、法華經ノ序說、佛總シテ十方、釋迦如來多寶、尊問答抄、日蓮上人、涅槃經ノ指ス、說トハ最終ノ、涅槃經ノ指ス、日蓮上人、尊問答抄、釋迦如來多寶、佛總シテ十方、定ニ云ク、御評、當ノ一切ノ經、中ニ法華最爲、第一云、華初心、又佛抄、日蓮、成佛抄、日蓮、華ヨリ外ノ經、ニハ已今當ノ、文ナキナリ、又ハ妙密上人、御返事、日蓮、日蓮ハ然ラズ、已今當ノ經文

て我が前に在りて、無数の偈を以つて讚めん、是の讚佛に由るが故に無量の功德を得ん、持經者を歎美せんは其の福復彼に過ぎん、八十億劫に於いて、最妙の色聲、及與香味觸を以つて持經者に供養せよ、是の如く供養し已りて、若須臾も聞くことを得ば、則ち應に自ら欣慶すべし、我今大利を獲つと、藥王今汝に告ぐ我が所説の諸經、而も此の經の中に於いて、法華最も第一なり。

爾の時に佛、復藥王菩薩摩訶薩に告げたまはく、我が所説の經典、無量千萬億にして、已説、今説、當説あり。而も其の中に於いて、此の法華經、最も爲難信難解なり。藥王、此の經は是

諸佛秘要の藏なり。分布して、妄りに人に授與すべからず。諸佛世尊の、守護したまふ所なり。昔より已來、未だ曾て顯説せず。而も此の經は、如來の現在にすら、猶怨嫉多し。況や滅度の後をや。藥王、當に知るべし。如來の滅後に、其能く書持し、讀誦し、供養し、他人の爲に説かん者は、如來則ち、衣を以つて之を覆ひたまふ爲し。又、佗方の現在の諸佛に護念せらるることを爲ん。是の人は大信力、及び志願力、諸善根力有らん。當に知るべし。是の人は、如來と共に宿するなり。則ち如來の手をもつて、其の頭を摩でたまふことを爲ん。藥王、在在處處に、若は説き、若は讀み、若は誦し、若は書き、若は經卷

チ深ク守リ一
經ノ肝心ヲ唱
題目ヲ我モム
へ人ニモ勸ム
日蓮上人ノ開
目抄ノ目今度
強盛ノ菩提心
ヲ起シテ退轉
セシト願シヌ
已ニ二十餘年
ガ間此法門ヲ
申ニ日々々々
年々ニ難カサ
ナル少シク難
カズチシラズ
大事ノ難ハ暫
ナリニ度ハ暫
クオクニ及ビ
今度ハスデニ
身命ニ及ブ共

上弟子トイヒ
且那トイヒ
俗人ナド來
テ重科ニ行ハ
ル謀叛ナド
ノ者如シド
華經第四云
此經者如來
在猶多怨嫉
滅後云云
御消息曰
云而此經者
來現在猶多
嫉況滅後
經文ハ日蓮
本國ニ生ゼ
ンバ但佛ノ
言ノミ有ツ
テ御

妙法蓮華經法師品第十

所住の處に、皆應に七寶の塔を起てて、極めて高廣嚴飾
ならしむべし。復、舍利を安んずること須ひじ。所
以は何ん。此の中には、已に如來の全身有す。此の塔を
ば、應に一切の華香、瓔珞、繒蓋、幢幡、伎樂、歌頌を
以つて、供養恭敬し、尊重讚歎したてまつるべし。若人
有りて、此の塔を見たてまつることを得て、禮拜し供養
せん。當に知るべし。是等は皆、阿耨多羅三藐三菩提に
近きぬ。藥王、多く人有りて、在家、出家、菩薩の道を
行せんに、若是の法華經を見聞し、讀誦し、書持し、供
養することを得ること能はずんば、當に知るべし。是の
人は、未だ善く菩薩の道を行せざるなり。若是の經典を

妙法蓮華經法師品第十

聞くことを得ること有らば、乃ち能善く菩薩の道を行ず
るなり。其れ衆生の、佛道を求むる者有りて、是の法華經
を、若は見、若は聞き、聞き已りて、信解し受持せば、
當に知るべし。是の人は、阿耨多羅三藐三菩提に近くこ
とを得たりと。
藥王、譬へば人有りて、渴乏して水を須ひんとして、彼
の高原に於いて、穿鑿して之を求むるに、猶乾ける土を
見ては、水尙遠しと知る。功を施すこと已ますして、轉
た溼へる土を見、遂に漸く泥に至りぬれば、其の心決定
して、水必ず近しと知らんが如く、菩薩も亦復是の如し。
若未だ是の法華經を、未だ聞かず、未だ解らず、未だ修

其義空シカル
ベシ譬バ花サ
キ菓ナラズ雷
ナリテ雨フシ
ザランガ如シ
佛ノ金言空シ
クシテ正直ノ
御經ニ大妄語
ヲ維ヘタルナ
ルベシ

大僧正日扇
れたしさて月
にか、れば浮
雲の、れは浮
もてなすさま
に見ゆる夜は
哉

日蓮上人(四
條殿御事ノ
日蓮法師品ノ
文ニ遺化四衆
比丘比丘尼優
婆塞優婆塞ト
説キ給フ此ノ
中ノ優婆塞ト
ハ貴邊ノ事ニ
アラズンバ誰
チカサ、ン、誰
既ニ法ヲ聞キ
信受シテ逆ラ
ハザレバナリ
不思議也不思
議也若然ラバ
日蓮法華經ノ
法師ナルコト
疑ヒナキ歟

妙法蓮華經法師品第十

習すること能はざらん。當に知るべし。是の人は、阿耨多羅三藐三菩提を去ること尙遠し。若聞き、解り、思惟し、修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近くことを得たりと知れ。所以は何ん。一切の菩薩の、阿耨多羅三藐三菩提は、皆此の經に屬せり。此の經は、方便の門を開きて眞實の相を示す。是の法華經の藏は、深固幽遠にして、人の能く到る無し。今佛菩薩を教化し成就して爲に開示す。藥王、若菩薩有りて、是の法華經を聞きて、驚疑し怖畏せん。當に知るべし。是を新發意の菩薩と爲く。若聲聞の人、是の經を聞きて、驚疑し怖畏せん。當に知るべし。是を増上慢の者と爲く。

藥王、若善男子、善女人有りて、如來の滅後に、四衆の爲に是の法華經を説かんと欲せば、云何にして應に説くべき。是の善男子、善女人は、如來の室に入り、如來の衣を著、如來の座に坐して、爾して乃し、應に四衆の爲に、廣く斯の經を説くべし。如來の室とは、一切衆生のなかの大慈悲心是なり。如來の衣とは、柔和忍辱心是なり。如來の座とは、一切法空是なり。是の中に安住して、然して後に、不懈怠の心を以つて、諸の菩薩、及び四衆の爲に、廣く是の法華經を説くべし。藥王、我餘國に於いて、化人を遣して、其が爲に聽法の衆を集め、亦化の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を遣して、其の説法を聽かしめん。是の諸の化人、

妙法蓮華經法師品第十

法を聞き信受し、隨順して逆はじ。若說法者、空閑の處に在らば、我時に廣く、天、龍、鬼神、乾闥婆、阿脩羅等を遣して、其の說法を聽かしめん。我異國に在りとも、時時に說法者をして、我が身を見ることを得しめん。若此の經に於いて、句逗を忘失せば、我還つて爲に説きて、具足することを得しめん。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

諸の懈怠を捨てんと欲せば應當に此の經を聽べし、是の經は聞くことを得難し信受する者亦難し、人の渴して水を須ひんとして、高原を穿鑿するに、猶乾燥の

土を見ては、水を去ること尙遠しと知り、漸く溼へる土泥を見ては、決定して水に近きぬと知るが如し、藥王汝當に知るべし、是の如き諸人等、法華經を聞かずんば、佛智を去ること甚だ遠し、若是の深經の聲聞の法を決了して、是諸經の王なるを聞き、聞き已りて諦かに思惟せん、當に知るべし此の人等は佛の智慧に近きぬ、若人此の經を説かば、應に如來の室に入り、如來の衣を著、而も如來の座に坐して、衆に處して畏るる所無く、廣く爲に分別し説くべし、大慈悲を室と爲し、柔和忍辱を衣とし、諸法の空を座と爲す、此に處して爲に法を説け、若此の經を説かん時、人有りて惡

此ノ佛一初發
二道心一亦從二
此佛一住二不
退地一トモ或
云從二此佛菩
薩一結緣シ還
テ於二此佛菩
薩一成就スト
モ云ヘリ、此
ノ經釋ナ案ズ
ルニ過去無量
劫ヨリ已來師
弟ノ契約有リ

第十一 見寶塔品(通論其二—寶塔の涌現—)
三變土田

解題 多くの珍寶を以て飾られたる塔が、突如として大地より涌き出で大衆皆仰ぎ見るといふ、不可思議の出来事があるのが當品である、之れ何の爲かといふに、上に於て已に述べたる如く、末代の法華經弘通の方法を説き、其の普及を可能ならしめんとするのが流通分—通論の役目である、法師品に其の受持の功德を説き、及び説法者の價値を論せられた、今や之の説を一層力あらしめんとする爲に、更に他の證明を加へなくてはならぬ、茲に於て多寶塔の出現、分身の來集といふことになる、疑

へるものは之れを破るべく、信せるものは進んで其の衝に當らんとするの決心を生ぜしめねばならぬ。大筋法師品の説法が終ると、俄に大地より七寶を以て莊嚴せる大寶塔が現れて大虚に懸る、高さ三千三百三十里餘、横幅一千六百六十六里餘といふのであるから、先づ人間界では想像の付かぬ大きなものである、其の怪なる大寶塔中から大音聲が響いて、釋迦尊の説法の眞なることを證明した、大寶塔の出現に驚ける大衆は、更に大音聲の響を未曾有の出来事なりと怪しむに至つた、そこで大樂説菩薩が一切の疑を代表して佛に問ひ奉ると、佛は此は東方の如來で、如何なる所にもあれ法

華經を説く所に出現して、證明とならんといふのが其の本願である、今我が法華經を説くを遙に來つて證明せんとするのであると答へられた、すると大樂説は重ねて此の佛を拜せんことを願はれるので、佛は之に對して仰せになるには、是の佛は他に其の姿を示す前には必ず十方に散在せる分身の佛を集めるといふ深重の願が有る、それ故に今其の分身の佛を集めて、汝等の希望を遂げさすであらう。

一方に於ては分身の佛は、各諸の菩薩に告げられるには、我今娑婆世界に往いて多寶如來の塔を供養し奉らんとすると、仰せになつて出發される、其處で娑婆で

は十方世界の所有珍客を迎へる爲に清淨瑠璃の地と變せしめ、瞬く間に立派な極樂世界と化した、陸續來集された佛は其の數無數であるから直に御坐敷は狹隘を感じた止むなく八方の各の二百萬億の世界を取淨め、山河なく通じて一佛國土とした、けれども猶不足なので更に同數の世界を先の如く取擴げて漸く總ての佛を一所に聚むることが出來た、これを三變土田といひ、三乘を一佛乘に會したことを具體的に現はしたのであると、古來學者は説きはやして居る。

分身は悉く來集した、茲に於て釋迦佛は靜に立て、右の指を以て七寶の戸を開き奉る、多寶如來は之れを謝し

て、聽て半座を釋迦牟尼佛に與へ給ふ、日蓮上人讚じて曰く、『青天に日月の並び出で給へるが如し』と、即時に釋迦牟尼佛は大神通力を以て、大衆を接つて虚空に在らしむ、之れを虚空會といひ、今迄の地上の説法を靈山會といふ、そこで佛は大音聲を出して告げ給ふには、誰か我が滅度の後、此の娑婆世界に於て法華經を弘め奉るべきや、早く誓言を奉るべし、如來は久しからずして當に入滅せんとするものであると、これより三度此の誓約を迫られる。これを三箇の勅宣といふ、又諸經の弘布と法華經の説法との難易を比較して六難九易といふ法門を説かれる、本文に就て了解し易ければ茲に略する、

而し此の勅宣に對して何者が果して末代弘通の導師たる
印授を帯びるであらうかは讀者の尤も注意すべき點であ
らう。

妙法蓮華經見寶塔品第十一

四天王宮持
國、毗沙門
廣目、增長ノ
四天王、其ノ

爾の時に佛前に七寶の塔あり。高さ五百由旬、縦廣二百
五十由旬なり。地より涌出して、空中に住す。種種の
寶物をもつて、之を莊校せり。五千の欄楯ありて、龕室
千萬なり。無數の幢旛、以つて嚴飾と爲し。寶の瓔珞を
垂れ、寶鈴萬億にして、其の上に懸けたりの四面に皆、
多摩羅跋栴檀の香を出して、世界に充徧せり。其の諸の
旛蓋は、金、銀、瑠璃、砗磲、碼碯、眞珠、玫瑰の七寶
を以つて合成せり。高く四天王宮に至る。三十三天は天
の曼陀羅華を雨して、寶塔に供養す。餘の諸の天、龍、

宮殿ハ須彌山ノ中腹ニアリ
彌山ノ頂上ニ
三十三天
彌山ノ北ノ四隅ニ八天宛ア
ノ帝釋天王ヲ加ヘテ三十三天トナル
日蓮上人ノ開目抄曰ク爾時
ニ東方寶淨世
界ノ多寶如來
高サ五百由旬
廣サ二百五十
由旬ノ大寶塔
塔ニ乘シテ教
主釋尊ノ天人
大會ニ自語相

違チセメラレ
テトノ様々ニ
ウノベ給ヒシ
宣サセ給ヒシ
カドモ不審猶
アルベシトモ
ミエズ、モテ
アツカヒテテ
ハセシ時佛前
ニ大地ヨリ涌
現シテ虚空ニ
ノホリ給フ例
セバ暗夜ニ滿
月ノ東山ヨリ
出ルガ如シ七
寶ノ塔大虚ニ
カ、ラセ給ヒ
テ大地ニモツ
カズ大虚ニモ
付セ給ハズ天
中ニ懸ツテ寶

夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人
非人等の千萬億の衆は、一切の華香、瓔珞、旛蓋、伎樂
を以つて、寶塔に供養して、恭敬、尊重、讚歎したてま
つる。

爾の時に寶塔の中より、大音聲を出して歎じて言はく、
善哉善哉釋迦牟尼世尊、能く平等大慧、教菩薩法、佛所護念の妙法華
經を以つて、大衆の爲に説きたまふ。是の如し是の如し釋迦牟尼世尊の所
説の如きは、皆是眞實なり。
爾の時に四衆、大寶塔の空中に住をせるを見、又塔の中
より出したまふ所の音聲を聞きて、皆法喜を得、未曾有
なりと怪み、座より、而も起ちて恭敬合掌して、卻きて

一面に住す。
爾の時に菩薩摩訶薩有り、大樂説と名く。一切世間の天、
人、阿脩羅等の心の所疑を知りて、佛に白して言さく、
『世尊、何の因縁を以つてか、此の寶塔有りて、地より
涌出せる。又其中より、是の音聲を發したまふ。』爾
の時に佛、大樂説菩薩に告げたまはく、
此の寶塔の中には、如來の全身有す。乃往過去に、東方
の無量千萬億阿僧祇の世界に、國を寶淨と名く。彼の
中に佛有す。號を多寶と曰ふ。其の佛、本菩薩の道を
行せし時、大誓願を作したまはく、
若我、成佛して滅度しなれば、十方の國土に於いて、

塔ノ中ヨリ梵音ヲ出シテ證明シテ云ク爾時ニ寶塔ノ中ヨリ出ニ大音聲一云云又(開目抄)曰大覺世尊ハ四十大餘年ノ限ヲ指シテ其内ノ恒河ノ諸經ヲ未レ顯ニ眞實ハ八年ノ當ニ法華ハ要ズ當ニ說ニ眞實ト定メ給ヒシカバ多寶佛大地ヨリ出現シテ皆是レ眞實ト證明ス分身ノ諸佛來集シ

テ長舌ヲ梵天ニ付ク此言赫々タリ明々タリ晴天ノ日ヨリモ明カニ夜中ノ満月ノ如シ道八道ヲ云フ

法華經を説く處有らば、我が塔廟、是の經を聽かんが爲の故に、其の前に涌現して、爲に證明と作りて、讚めて「善い哉」と言はん。彼の佛成道し已りて、滅度の時に臨みて、天人大眾の中に於いて、諸の比丘に告げたまはく、「我が滅度の後我が全身を供養せんと欲せん者は、應に一の大塔を起つべし。」其の佛、神通願力を以つて、十方世界の在在處處に、若し法華經を説くこと有らば、彼の寶塔、皆其の前に涌出して、全身塔の中に在して、讚めて「善い哉善い哉」と言ふ。大樂説、今多寶如來の塔、法華經を説くを聞

きたまはんが故に、地より涌出して、讚めて「善い哉善い哉」と言ふ。是の時に大樂説菩薩、如來の神力を以つての故に、佛に白して言さく、「世尊、我等願はくば、此の佛身を見たてまつらんと欲す。」佛、大樂説菩薩摩訶薩に告げたまはく、是の多寶佛には深重の願有せり。若我が寶塔、法華經を聽かんが爲の故に、諸佛の前に出でん時、其我が身を以て、四衆に示さん。欲すこと有らば、彼の佛の分身の諸佛、十方世界に在して説法したまふを、盡く一處に還し集めて、然

して後に、我が身乃ち出現せんのみ。大樂説、我が分身の諸佛、十方世界に在して、説法する者を、今應當に集むべし。

大樂説、佛に白して言さく、世尊、我等亦願はくば、世尊の分身の諸佛を見たてまつ

り、禮拜し供養せんと欲す。爾の時に佛、白毫の光を放ちたまふに、即ち東方、

五百萬億那由佉恆河沙等の、國土の諸佛を見たてまつる。彼の諸の國土は、皆頗黎を以つて地と爲し、寶樹、寶衣、

以つて莊嚴と爲して、無數千萬億の菩薩、其の中に充滿せり。徧く寶幔を張り、寶網を上羅けたり。彼の國の

諸佛、大妙音を以つて、諸法を説きたまふ。及び無量千萬億の菩薩の、諸國に徧滿して、衆の爲に法を説くを見

る。南西北方、四維上下の白毫相の光の、所照の處も亦

復是の如し。爾の時に十方の諸佛、各衆の菩薩に告げて言はく、

善男子、我今應に、娑婆世界の釋迦牟尼佛の所に往き、

并びに多寶如來の寶塔を供養すべし。時に娑婆世界、即ち變じて清淨なり。瑠璃を地と爲し

て、寶樹莊嚴せり、黄金を繩と爲して、以つて八道を界

ひ、諸の聚落、村營、城邑、大海、江河、山川、林藪無

く、大寶の香を焼き、曼陀羅華徧く其の地に布き、寶の

三變土田

日蓮上人(松野殿御返事)

日退轉ナク修
行シテ最後臨
終ノ時ヲ待テ
御覽セヨ妙覺
ノ山ニ走リ登
リテ四方ナキ
ツト見ルナラ
バアラ面白キ
法界光土ニヤ
シテ瑠璃ナ以
テ地ナシ金
ノ繩ヲ以テ八
ノ道ヲ以テ天
ヨリ四界ノ花
ヲ開ク諸佛音
樂ハ常ニ我佛
淨ノ風ニソヨ
メキ快樂ヲ我
シ給フ數ニ列
等モ其數ニ列

ナリテ遊戯シ
ハヤ近キ信事
心弱クシテハ
カ、行ク度ハ
所へ行クベカ
ラズ已上ノカ
本地ノ娑婆、
常寂光土ノヨ
ソホヒ現前ニ
見ルガ如シ
目眞鄰陀山
石山ト譯ス鐵
園山ト譯ス鐵
ノ堅牢ヲ誇レ
ルモノナリ
摩訶梵語ナ
リ大ト譯スナ
鐵圍山須彌
山ノ其ノ周圍
ニ七金山八

網幔を以つて、其の上に羅け覆ひ、諸の寶鈴を懸たり。
唯此の會の衆を留めて、諸の天人をば移して佗土に置
く、是の時に諸佛、各一りの大菩薩を將ゐて、以つて侍
者と爲し、娑婆世界に至りて、各寶樹の下に到たまふ。
一の寶樹、高さ五百由旬、枝葉、華果次第に莊嚴せり。
諸の寶樹の下に、皆師子の座有り、高さ五由旬、亦大
寶を以つて之を校飾せり。爾の時に諸佛、各此の座に於
いて結跏趺坐したまふ。是の如く展轉して、三千大千世
界に徧滿せり、而も釋迦牟尼佛の、一方の所分の身に於
いて、猶故未だ盡きず。
時に釋迦牟尼佛の所分身の諸佛を容受せんと欲すが故に

八方に各、更に二百萬億那由佗國を變じて、皆清淨な
らしめたまふ。地獄、餓鬼、畜生、及び阿脩羅有ること
無し。又諸の天人を移して佗土に置く。所化の國、亦
瑠璃を以つて地と爲して、寶樹莊嚴せり。樹の高さ五百
由旬、枝葉、華果、次第に嚴飾せり。樹下に皆寶の師子
の座有り、高さ五由旬、種種の諸寶を以つて莊校と爲
す。亦大海、江河、及び目眞鄰陀山、摩訶目眞隣陀山、
鐵圍山、大鐵圍山、須彌山等の諸の山王無く、通じて一
佛國土と爲りて、寶地平正なり。寶をもつて交露せる幔、
徧く其の上に覆ひ、諸の旛蓋を懸け、大寶の香を燒き、
諸天の寶華、徧く其の地に布けり。釋迦牟尼佛、諸佛の

香水海アリ次
ニ鹽水海アリ
其中ニ四方ニ
四州アリ吾等
人類ノ住メル
所ナリ之ノ一
大鹽水海チ圍
メルモノ即チ
鐵圍山トナス

當に、來り坐したまふべきを爲つての故に、復八方に於いて、各更に二百萬億那由陀の國を變じて、皆清淨ならしめたまふ。地獄、餓鬼、畜生及び阿脩羅有ること無し。又諸の天人を移して陀土に置く。所化の國、亦瑠璃を以つて地を爲して、寶樹莊嚴せり。樹の高さ五百由旬、枝葉、華果次第に莊嚴せり。樹下に皆、寶の師子の座有り。高さ五由旬、亦大寶を以つて之を校飾せり。亦大海、江河、及び目眞鄰陀山、摩訶目眞鄰陀山、鐵圍山、大鐵圍山、須彌山等の諸の山王無く、通じて一佛國土と爲りて、寶地平正なり。寶をもつて交露せる幔、徧く其の上に覆ひ、諸の旛蓋を懸け、大寶の香を燒き、諸天の寶華、

徧く其の地に布けり。爾の時に、東方の釋迦牟尼佛の所分の身の、百千萬億那由他恆河沙等の國土の中の諸佛、各各に說法したまふ。此に來集したまへり。是の如く次第に、十方の諸佛、皆悉く來集して、八方に坐したまふ。爾の時に一一の方の、四百萬億那由他の國土に、諸佛如來其の中に徧滿したまへり。是の時に諸佛、各寶樹の下に在し、師子の座に坐して、皆侍者を遣して、釋迦牟尼佛を問訊したまふ。各寶華を齎つて、掬に滿てて之に告げて言はく、善男子、汝、耆闍崛山の釋迦牟尼佛の所に往詣して我が辭の如く曰せ、

『少病少惱にして、氣力安樂にましますや、及び菩薩、
聲聞衆、悉く安穩なりや否や。』此の寶華を以つて佛に散
じ、供養して是の言を作せ。彼の某甲の佛、與に此の寶
塔を開かんと欲したまふと。

諸佛の使を遣したまふこと、亦復是の如し。
爾の時に釋迦牟尼佛、所分身の諸佛の、悉く已に來集し
て、各各、師子の座に坐したまふを見し、皆諸佛の、同
じく與に寶塔を開かんと欲したまふを聞しめして、
即ち座より起ちて、虚空の中に住したまふ。一切の四衆、
起立合掌し、一心に佛を觀たてまつる。
是に於いて釋迦牟尼佛、右の指を以つて、七寶の塔の戸

を開きたまふ。大音聲を出すこと、關鑰を却けて大城の
門を開くが如し。即時に一切の衆會、皆多寶如來の寶塔
の中に於いて、師子の座に坐したまひ、全身散せざるこ
と禪定に入るが如くなるを見、又其の善い哉善い哉釋迦
牟尼佛、快く是の法華經を説きたまふ。我是の經を聽か
んが爲の故に、而も此に來至せりと言ふを聞く。
爾の時に四衆等、過去の無量千萬億劫に滅度したまへる
佛の、是の如き言を説きたまふを見て、未曾有なりと歎
じ、天の寶華聚を以つて、多寶佛、及び釋迦牟尼佛の上
に散す。
爾の時に多寶佛、寶塔の中に於いて、半座を分ち、釋迦

日蓮上人(開
目抄)曰(十方
ノ諸佛來集セ
ル皆我が分身
ナリトナラハ
セ給ヒ寶塔ハ
虛空ニ釋迦ハ
寶坐チ並ニ日
月ノ青天ニ並
出セルガ如シ
人天大會ハ星
ヲツラネ分身
ノ上諸佛ハ地
下ノ師寶樹ノ
カニマシマユ

聖主世尊多
寶如來ヲ指ス

牟尼佛に與へて、是の言を作したまはく、『釋迦牟尼佛、此の座に就きたまふべし。』即時に釋迦牟尼佛、其の塔の中に入りて、其の半座に坐して、結跏趺坐したまふ。爾の時に大衆、二如來の、七寶の塔の中の、師子の座上に在して、結跏趺坐したまふを見てまつりて、各是の念を作さく、佛高遠に坐したまへり。唯願はくば如來、神通力を以つて、我が等輩を、俱に虛空に處せしめたまへ。即時に釋迦牟尼佛、神通力を以つて、諸の大衆を接して、皆虛空に在きたまふ。大音聲を以つて、普く四衆に告げたまはく、

誰か能く此の娑婆國土に於いて、廣く妙法華經を説かん。今正しく是時なり。如來久しからずして、當に涅槃に入るべし。佛此の妙法華經を以つて、付囑して在ること有らしめん欲す。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、
聖主世尊、久しく滅度したまふと雖も、寶塔の中に在して、尙法の爲に來りたまへり、諸人云何ぞ、勤めて法に爲はざらん、此の佛滅度したまひて無央數劫なり、處處に法を聽きたまふことは、遇ひ難きを以つての故なり、彼の佛の本願は、我滅度の後、在所往に、常に法を聽かんが爲なり、又我が分身の無量の諸佛、恆

沙等の如く來りて法を聽き、及び滅度の、多寶如來を
 見たてまつらんと欲して、各妙士及び弟子衆、天人龍
 神、諸の供養の事を捨てて、法をして久しく住せしめ
 んが故に此に來至したまへり、諸佛を坐せしめんが爲
 に、神通力を以つて、無量の衆を移して、國をして清
 淨ならしむ、諸佛各各に、寶樹の下に詣りたまふ、清
 涼の池の、蓮華莊嚴せるが如し、其の寶樹の下、諸
 の師子の座に、佛其上に坐したまひて、光明嚴飾せ
 ること、夜の闇の中に大なる炬火を然せるが如し、
 身より妙香を出して十方の國に徧くしたまふ、衆生
 薰を蒙りて、喜自ら勝へず、譬へば大風の、小樹の

枝を吹くが如し、是の方便を以つて、法をして久しく
 住せしむ、諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後に、誰か能
 く斯の經を護持し讀誦せん、今佛前に於いて自ら誓言
 を説け、其多寶佛久しく滅度したまふと雖も、大誓願
 を以つて師子吼したまふ、多寶如來及與我が身、集む
 る所の化佛、當に此の意を知るべし、諸の佛子等、誰
 か能く法を護らん、當に大願を發して、久しく住する
 ことを得しむべし、其能く此の經法を護ること有らん
 者は、則ち爲、我及び多寶を供養するなり、此の多寶
 佛、寶塔に處して、常に十方に遊びたまふ、是の經の
 爲の故なり、亦復諸の來りたまへる化佛の、諸の世

六難九易

日蓮上人(開
目抄)曰日本
國ニコレナシ
レ一人ナリコ
蓮一人ナリコ
シ出一言モ申
バ

父母兄弟師匠
ニ國主ノ王難
必來ルベシイ
ハズバ慈悲ナ
キニ似タリト
思惟スルニ法
華經涅槃經等
ニ此二邊チ合
セ見ルニイハ
ズバ今生ニ事
ハクトモ後生
ハ必無間地獄
ニ墮スベシイ
フナラバ三障
四魔必競ヒ起
ルベシト申リ
又二邊ノ中ニ
ハイフベシ王
難出來ノ時ハ
退轉スベクシ
バ一度ニ思ヒ

妙法蓮華經見寶塔品第十一

界を、莊嚴し光飾したまふ者を供養するなり、若此の
經を説かば、則ち我、多寶如來、及び諸の化佛を見たと
まつるなるべし、諸の善男子、各諦かに思惟せよ、此
は爲難事なり、宜しく大願を發すべし、諸餘の經典、
數恆沙の如し、此等を説くと雖も未だ爲難しとするに
足らず、若須彌を接りて佗方の無數の佛土に擲げ置か
んも、亦未だ爲難しとせず、若足の指を以つて、大千
界を動して、遠く佗國に擲げんも、亦未だ爲難しとせ
ず、若有頂に立ちて、衆の爲に、無量の餘經を演說せ
んも、亦未だ爲難しとせず、若佛の滅後に、惡世の中
に於いて、能く此の經を説かん、是則ち爲難し、假使人

有りて、手に虚空を把りて、以つて遊行すとも、亦未
だ爲難しとせず、我が滅後に於いて、若は自らも書き
持ち、若は人をして、書かしめん、是則ち爲難し、若
大地を以つて、足の甲上に置きて、梵天に昇らんも、
亦未だ爲難しとせず、佛滅度の後、惡世の中に於て、
暫くも此の經を讀まん、是則ち爲難し、假使劫燒に、
乾れたる草を擔ひ負ひて、中に入りて燒けざらんも、
亦未だ爲難しとせず、我が滅度の後に若此の經を持ち
て一人の爲にも説かん、是則ち爲難し、若八萬四千の
法藏、十二部經を持ちて、人の爲に演說して、諸の聽
かん者をして、六神通を得しめん、能く是の如くすと

止ムベシト且
クヤスラヒシ
程ニ寶塔品ノ
六難九易、我
レナリ、我等
程ノ小力ノ者
須彌山ハナク
トモ我者乾草
無通ノ者劫火
ニ負ツテ劫火
我等程ノ無智
ノ者恒沙ノ經
ホエトバ讀ミ
經ハ一句法華
ガ末代ニ持チ
ルベシ、今レナ
強盛ノ菩提心

チ起シテ退轉
セツト願ヒシ
劫燒成住、
壞空ノ四大
劫ノ中、壞劫
ノ初天日多ク
出テ火力遂ニ
地ヲ燒盡ス之
レチ劫燒ト云
ヒ又劫火ト云
フ是名持戒涅
槃經正安國論
人立證ス云
ニ引法ヲ護ル
ク正法ヲ執持
者ハ應當ニ刀
劍器杖ヲ執持
スベシト雖我
持ツト雖我

雖も、亦未だ爲難しと爲す、我が滅後に於いて、此の經を聽受して、其の義趣を問はん、是則ち爲難し、若人法を説きて、千萬億無量無數、恆沙の衆生をして、阿羅漢を得、六神通を具せしめん、是の益有りとも雖も亦未だ爲難しと爲す、我が滅後に於いて、若能く、斯の如き經典を奉持せん、是則ち爲難し、我佛道を爲て、無量の土に於いて、始より今に至るまで、廣く諸經を説く、而も其の中に於いて、此の經第一なり、若能く持つこと有らば、則ち佛身を持つなり、諸の善男子、我が滅後に於いて、誰か能く、此の經を受持し讀誦せん、今佛前に於いて、自ら誓言を説け、此の經は持つこと難し、

若暫くも持つ者は、我即ち歡喜す、諸佛も亦然なり、是の如き人は、諸佛の歎めたまふ所なり、是則ち勇猛なり、是則ち精進なり、是を戒を持ち、頭陀を行する者名く、則ち爲疾く、無上の佛道を得たり、能く來世に於いて、此の經を讀み持たんは、是眞の佛子、淳善の地に住するなり、佛の滅度の後に、能く其の義を解せんは、是諸の天人、世間の眼なり、恐畏の世に於いて、能く須臾も説かんは、一切の天人、皆應に供養すべし。

等ヲ説キテ名
 ケテ持戒ト曰
 ハン
 頭陀を行す
 戒ニ五戒十戒
 二百五十戒ノ
 別アルガ如ク
 頭陀ニモ十二
 ノ行相アリ、
 一住阿蘭若處
 (塵界ヲ離ル
 、コト)ニ常
 乞食乃至七著
 兼納衣ヘスタ
 レタル衣ヲ洗
 ヒ漸ク寒暑ヲ
 防ク)乃至十
 樹下坐十一露
 地坐十二但坐
 不臥已上

大僧正 慈 鎮

一法をしぼし持てば十の罪も

をかさぬ人となりけるかな

第十二 提婆達多品(通論其三) 第五回の授記(龍女の成佛)

解題 佛の從弟に提婆達多といふ人があつた、非常な學者であつた爲に却つて佛に代らんとする野心を懷き、阿闍世太子を語らうて彼に父の頻婆娑羅王を弑せしめて新王とならしめ、自らは佛をあやまたんとしたけれども僅に佛足より血を出さしめたに過ぎなかつた、而しこれが後に佛教に於て尤も重科と稱せらるゝに至りし五逆罪の一なる出佛身血の大罪である、されば提婆は大地破れて現身に無間地獄へ墮ちたとある、其の大惡人の過去の因縁を明かし、之れに天王如來の記別を授く、次で八歳の

龍女が變成男子して成佛を南方に示すといふ、畜種女人の向上得果を説く、二者俱に末代に法華經を弘むる場合、惡人と問はず女人と論せず、何れも妙經力の前に同一の證を得べきことを諭されたのである、即ち上の三箇の勅宣に次で二箇の諫曉を賜ふと稱するのである。

大筋 佛は言を更めて仰せられるには、過去に於て我れは常に法華經を求めて倦まなかつた、或時王者として五欲を逐うて自在なるべき身でありしが、それをば打捨てて阿私仙人に従うて法華經の爲に菜つみ水汲み薪を拾ひ乃至身を以て牀とさへした事もあつた、而し其の御影で此の釋迦佛となることを得たのである、然るに其の仙人

とは何者ぞといふに、今の提婆であつた、我れは彼れの教導にて此の金色の佛身に到達したのである、彼れはかゝる法華經の行者であつたのであるから、やがては成佛の時が来るであらう、其の時は天王如來と稱へ奉るのである、と茲に於て彼れ提婆は畢竟正法護持の權化となつたのである。

其時に多寶佛の御弟子の智積菩薩が、多寶如來に、最早御用も濟んだ様ですが、御歸りになつては如何ですか、と申し上げると、釋迦如來がまあ少し御待ちなさい、今文殊が歸つて來ますから、御話しでもしてそれから御歸りなさいと仰せになる、恰も文殊菩薩が龍宮布教より歸

つて來たので、早速狀況を御聞きになると、いや妙法の功力は貴きもの、八歳の龍女が直に成佛の域に到達したとの土産話、處で智積は驚いた、釋迦佛の佛となられたのは實に一通の困難ではなかつたと承つて居る、然るを左様に易々と佛果を得るといふのは頗る矛盾である、と大に論じて居る處へ問題の龍女が、忽ちに現れた、それを見たら舍利弗直に彼女を捕へていふには、汝は久しからずして佛果を得べしと信じて居るか、それは到底肯定し難き事である、女人は一體五つの障がある、ごうして成佛することが出来るぞと喰つて掛る、龍女は笑うて一の寶珠を世尊に奉り、而して曰ふ様には、我が成佛は世

尊の珠を納受ましますよりも猶速であらうと、いふ中に忽ち男子と變じ南方世界で成佛を唱へた、これを見た智積舍利弗等は默然として妙の經力のいよく貴きを信受した。

妙法蓮華經提婆達多品第十二

爾の時に佛、諸の菩薩、及び天人四衆に告げたまはく、吾過去無量劫の中に於いて、法華經を求めしに、懈倦あること無し。多劫の中に於いて、常に國王と作りて、願を發して、無上菩提を求めしに、心退轉せず。六波羅蜜を満足せんと欲するを爲つて、布施を勤行せしに、心に象馬七珍、國城妻子、奴婢僕從、頭目髓腦、身肉手足を吝惜すること無く、軀命をも惜まざりき。時に世の人民、壽命無量なり。法の爲の故に、國位を捐捨して、政を太子に委せ、鼓を擊ちて、四方に宣

大僧正行基
法華經をわが
えしこころは薪
こりみ水くみ
菜つみぞえし
仕へてぞえし

阿私阿私
陀仙人略私
無比端正
等下譯提婆
達多過去
本名上人
日本上人
禱抄上人
達多上人
王多上人
如來孫伯迦
ノ御子阿難尊

令して法を求めき。
誰か能く我が爲に、大乘を説かん者なる。吾當に身を
終ふるまで、供給走使すべし。時に仙人有り。來りて
王に白して言さく、「我大乘を有てり。妙法蓮華經と名
く。若我に違ひたまはずば、當に爲に宣説すべし。」王
仙の言を聞きて、歡喜踊躍し、即ち仙人に隨ひて、所
須を供給し、果を採り水を汲み、薪を拾ひ食を設け、
乃至身を以つて牀座と作ししに、身心倦きこと無かり
き、時に奉事すること千歳を経て、法の爲の故に、精
勤給侍して、乏しき所無からしめき。
爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説

きて言はく、

我過去の劫を念ふに、大法を求むるを爲つての故に、
世の國王と作れりと雖も、五欲の樂を貪らざりき、鐘
を推きて四方に告ぐ、誰か大法を有たん者なる、若我
が爲に解説せば、身當に奴僕と爲るべし、時に阿私仙
有り、來りて大王に白さく、我微妙の法を有てり、世
閒に希有なる所なり、若能く修行したまはば、吾當に
汝が爲に説くべし、時に王仙の言を聞きて、心に大喜
悅を生じ、即便仙人に隨ひて、所須を供給し、薪及び
果林を採りて、時に隨ひて恭敬して與へき、情に妙法
を存せるが故に、身心懈倦無かりき、普く諸の衆生の爲に、

者ノ舎兄ナリ
善聞長者ノリ
スメノ腹ナリ
轉輪聖王ノ御
一門南閻浮提
ニハ賤シカラ
ザル人也乃至
我身ニハ五法
チ行ツテ佛ヨ
リモ尊ゲテナ
シ鐵輪ノシテ
千輻輪ニツケ
螢火ヲ集メテ
白毫ヲ集メテ
萬寶藏ニシテ
藏ヲ胸ニ浮ベ
象頭山ニ戒場
チ立テ多クノ
佛弟子ヲサソ
チトリ佛ノ御

足ニヌラント
企テ蓮華比丘
尼ヲ放ツテ佛
石ヲ指チテヤ
ノ御指チテヤ
逆チ天竺ノ結
ハ五帝ノ結句
人ヲ集メ佛竝
ビニ御弟子檀
那等ニアガチ
ナス程ニ乃至
終ニ王舍城ノ
北門ノ大地破
レテ阿鼻大地
ニ墮チニキ
三千大千世界
ノ人一人モ是
チ見ザル事ナ
カリキザレ
バ大地微塵劫

大法を勤求して、亦己が身、及び五欲の樂の爲にせず、
故に大國の王と爲りて、勤求して此の法を獲て、遂に
成佛を得ることを致せり、今故に汝が爲に説く、
佛、諸の比丘に告げたまはく、
爾の時の王とは、則ち我が身是なり。時の仙人とは、
今の提婆達多是なり。○提婆達多が善知識に由るが故に、
我をして六波羅蜜、慈悲喜捨、三十二相、八十種好、
紫磨金色、十力、四無所畏、四攝法、十八不共、神通
道力を具足せしめたり。○等正覺を成じて、廣く衆生を
度すること、皆提婆達多が善知識に因るが故なり。○諸
の四衆に告げたまはく、』

提婆達多、却つて後、無量劫を過ぎて、當に成佛する
ことを得べし。○號をば天王如來、應供、正徧知、明
行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、
世尊と曰はん。○世界をば、天道と名けん。○時に天王佛、
世に住すること二十中劫、廣く衆生の爲に、妙法を説
かん。○恆河沙の衆生、阿羅漢果を得、無量の衆生、緣
覺の心を發し、恆河沙の衆生、無上道の心を發し、無
生忍を得て、不退轉に住せん。○時に天王佛、般涅槃の
後、正法世に住すること二十中劫、全身の舍利に、七
寶の塔を起つ、高さ六十由旬、縱廣四十由旬ならん。○
諸天人、悉く雜華、抹香、燒香、塗香、衣服、瓔珞、

ハ過グトモ出無
 間大城ヲトコ
 ヅ可ラズトコ
 ソ思ヒテラ法
 華經ニシテ天
 王如來トナラ
 セ給ヒケルコ
 ケレ不思議ニ尊
 佛ニテリ給ハ
 ノ語ラレシハ
 一業所感ナレ
 巴皆無間地獄
 ノ苦チ離レヌ
 華經ノ恩德也

幢旛、寶蓋、伎樂、歌頌を以つて、七寶の妙塔を禮拜
 し供養せん。無量の衆生、阿羅漢果を得、無數の衆生、
 辟支佛を悟り、不可思議の衆生、菩提心を發して不退
 轉に至らん。佛、諸の比丘に告げたまはく、
 未來世の中に、若し善男子、善女人有りて、妙法蓮華經の提婆達多品を
 聞きて、淨心に信敬して、疑惑を生ぜざらん者は、地獄、餓鬼、
 畜生に墮ちずして、十方の佛前に生ぜん。所生の處には、常に
 此の經を聞かん。若し人天の中に生せば、勝妙の樂を受け
 若し佛前に在らば、蓮華より化生せん。
 時に下方の、多寶世尊の所從の菩薩、名を智積と曰ふ。
 多寶佛に啓さく、當に本土に還りたまふべし。

釋迦牟尼佛、智積に告げて曰はく、
 善男子、且く須臾を待て、此に菩薩有り、文殊師利と名
 く。與に相見るべし。妙法を論說して、本土に還るべし。
 爾の時に文殊師利、千葉の蓮華の、大いさ車輪の如くな
 るに坐し、俱に來れる菩薩も、亦寶蓮華に坐して、大海
 の娑竭羅龍宮より、自然に涌出して、虚空の中に住し、
 靈鷲山に詣でて、蓮華より下りて、佛前に至り、頭面に
 二世尊の足を敬禮したてまつる。修敬すること已畢りて、
 智積の所に往きて、共に相慰問して、却きて一面に坐し
 ぬ。
 智積菩薩、文殊師利に問はく、

仁、龍宮に往きて、化する所の衆生、其の數幾何ぞ。
文殊師利の言はく、

其の數無量にして、稱計すべからず。口の宣ぶる所に
非ず。心の測る所に非ず。且く須臾を待て、自ら當に
證有るべし。

所言未だ竟らざるに、無數の菩薩、寶蓮華に坐して、海
より涌出して、靈鷲山に詣でて、虚空に住せり。此の
諸の菩薩は、皆是文殊師利の化度せる所なり。菩薩の
行を具して、皆共に六波羅蜜を論説す。本聲聞なりし人
は、虚空の中に在りて、聲聞の行を説く。今皆大乘の空
義を修行す。文殊師利、智積に謂つて曰はく、海に於い

て教化せること、其の事此の如し。

爾の時に智積菩薩、偈を以つて讚めて曰はく、

大智徳勇健にして、無量の衆を化度せり、今此の諸の
大會、及び我皆已に見つ、實相の義を演暢し、一乗の
法を開闡して、廣く諸の羣生を導きて、速かに菩提を成

せしむ、

文殊師利の言はく、

我海中に於いて、唯常に妙法華經を宣説す。

智積菩薩、文殊師利に問ひて言はく、

此の經は甚深微妙にして、諸經の中の寶、世に希有なる
所なり。頗衆生の勤加精進し、此の經を修行して、速か

陀羅尼 又 總持
トモイフ多ク
ノ義ヲ含ムチ
以テ其ノ文字
ヲ譯出スルコ
ト能ハズト
ト能ハズト
キ時ヲ尤モ短
ス一彈指ニ六
十利ヲ指ス六
ト云フ那ア指
ハ爪ハシキ也
不轉最也
凡夫ノ身ニ退
クコトナク必

也 成佛スル位
日蓮上人(法
華題目抄)曰
サレバ銀色女
經ニハ三世ノ
諸佛ノ眼ハ大
地ニ落トモ女
人ハ佛トナル
ベカズト説レ
大論ニハ清風
ハトモ人ノ心
ト云ヘリ此ノ
如ク諸經ニ嫌
ハレタリシ女
人ヲ文殊師利
菩薩ノ妙ノ利
字ヲ説キ給ヒ
シカバ忽ニ佛

に佛を得る有りや不や。

文殊師利の言はく、
娑竭羅龍王の女有り。年始めて八歳なり。智慧利根にし
て、善く衆生の諸根の行業を知り、陀羅尼を得、諸佛の
所説の甚深の祕藏悉く能く受持し、深く禪定に入りて、
諸法を了達し、刹那の頃に於いて、菩提心を發して不退
轉を得たり。辯才無礙にして、衆生を慈念すること、猶
赤子の如し。功德具足して、心に念ひ口に演ぶること、微
妙廣大なり。慈悲仁讓、志意和雅にして、能く菩提に至
れり。智積菩薩の言はく、
我釋迦如來を見たてまつるに、無量劫に於いて、難行苦

行し、功を積み徳を累ねて、菩薩の道を求むること、未
だ曾て止息したまはず。三千大千世界を觀るに、乃至芥
子の如き許りも、是菩薩にして、身命を捨てたまふ處に
非ざることを有ること無し。衆生の爲の故なり。然して後
に、乃ち菩提の道を成ずることを得たまへり。此の女の
須臾の頃に於いて、便ち正覺を成ずることを信せず。
言論未だ訖らざる時に、龍王の女、忽ちに前に現じて、
頭面に禮敬し、却きて一面に住して、偈を以つて讚めて
曰さく、
深く罪福の相を達して、徧く十方を照したまふ。微妙の
淨法身、相を具せること三十二、八十種好を以つて、